

第 11 回高等学校改革プラン推進委員会（第一推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 11 月 12 日（土）午後 2 時 00 分～午後 5 時 00 分

2 場所 長野県庁西庁舎 1 階 111 号会議室

3 出席委員

中村 正行委員長	塚田 芳樹委員
森野 貞雄副委員長	清水 保委員
青木 一委員	坂口 昌夫委員
中沢 一委員	小山 壽一委員
小山 元彦委員	宮本 精一委員
牧 重信委員	丸山 稔委員

4 開会

（三澤教育支援主事）

委員の皆さま、おはようございます。

定刻となりましたので、第 11 回の推進委員会をよろしくお願い申し上げます。では、委員長さん、よろしくお願いいたします。

（中村委員長）

皆さん、こんにちは。

それでは第 11 回高等学校改革プラン推進委員会を始めさせていただきます。

今日は、地域、団体からのご意見をお伺いして、この推進委員会の議論に役立てていただきたいということで募集しました。そうしましたところ 14 件の応募を頂きまして、一件もお断りすることなく、すべての方に発表いただくことにいたしました。

そのため限られた時間の中で、公平にご発表いただくことといたしたため、非常に短い時間の割り当てとなってしまったことはおわびしたいと思いますが、推進委員会の議論そのものに今日は皆さん方の発表を生かしていきたいということで、こちらからも質問等させていただきながら、進めていきたいと考えております。どうぞ、ご協力のほどをお願いしたいと思います。

推進委員会の役割の中には、各校の魅力づくり、高等学校の魅力づくりというのがあります。これは各校が努力されている魅力づくりもひとつですが、もうひとつシステムとしての魅力づくりという観点もあろうかと思えます。

そのため順番を第 1 区関連、第 2 区関連というふうに、お手元の資料のようにある程度まとめさせていただきまして、発表をこの順番でやっていただくということになりました。特にご提案が似ているようなところは、できるだけ説明が重複をしているところは、その辺を考慮していただいて、時間の進行にどうぞご協力をいただきたいと思います。

それから、委員の皆さんも時間が限られています。あらかじめ資料はお配りしてあるわけですが、今疑問に思われたこと、すぐこの場でご質問いただいて、できるだけ提案者のご提案を議論にすぐ生かしていただきたいと思います。

タイムスケジュールが、皆さんにも配られていると思います。このとおり発表5分、質疑応答5分、手短にということで慌ただしいわけですが、お願いしたいと思います。

司会進行は私でよろしいでしょうか。それではすぐ始めさせていただきます。タイトルと、それから発表者のお名前をご紹介しますので、発表者席でお願いしたいと思います。それでは、お名前の読み方をもしかしたら間違えるかもしれませんがお許してください。

「飯水岳北地域の高校再編について」飯山市長木内正勝さま、よろしくお願いいたします。

(木内飯山市長)

飯山市長の木内でございます。私どものほうから、飯水岳北4市村の首長会の連名の下にそれぞれご提案を申し上げます。よろしくお願いいたします。

私どもは、県教育委員会の提案を受けた後、飯水岳北地区の高校の将来を考える会といった形で、それぞれ地元県関係者60数人が集まって、提案をしようという形でまとめてまいりました。最終的には、いろいろな意見が出た中で、首長会連名で統一案をそれぞれお立てをいたしたところでございますが、それぞれのいろいろな主張があるということで、統一案には至らなかったかということでもあります。

その中で4首長会で、統一案に提案したことをこちらのほうに提案させていただいたということでございます。基本的な路線は、飯水岳北地域の人材育成活性化のためには、将来においても特色と魅力ある高校が2校あることが最も望ましいとしているところでございます。

県教育委員会提案の候補案は、将来の生徒数、学級数の減少を推測し、また現在設置されている特色学科を有効に生かして、学びの選択肢を提供しつつ、教育の質を確保する観点から飯山市内普通科高校3校を統合するとされているところでございます。

飯水岳北地域自治体としては、現在の4高校、これは飯山照丘、飯山北、飯山南、下高井農林、この4校があるわけでございますが、その生徒の多様な進路希望に対応できるよう、再編するという基本的な立場に立って考える必要があると強く認識し、次のように提案を申し上げる次第でございます。

1つといたしまして、飯水岳北地域4高校を2校に統合する。これが基本でございます。2点といたしまして、飯山市内普通科高校3校を1校に統合する。これは県の教育委員会の提案と同じでございますが、その中で3点ございます。

といたしまして、小中学生、保護者、地域の不安を解消するために、平成25年、これはこの地域にとって9学級編成が可能な年でございます。平成25年までは2校とし、その間に新しい高校づくりを地域とともに行うということを提案するところでございます。県教委の提案によりますと1校ということでございますが、今まで3校あったものが1校になるという形の中で、非常に2つキャンパスを使うというような提案の内容であり、部活などいろいろな一体的な教育の中で、非常に難しい面があるので、平成25年までは何とか2校を存続してほしいといったことでございます。

といたしまして、理数科、体育科、コース制など、生徒が持つ多様な学習ニーズに対応できる魅力ある教育課程の編成に努める。

といたしまして、高校改革は義務教育の改革とともに、深く連動すべきものであり、

飯水岳北地域における次世代の人材育成のためにも、中高連携についても研究をするということでございます。

大きな3番でございますが、飯水岳北地域の基幹産業である農林業の発展のため、下高井農林高校の持つ意義を重視し、専門性を高めるとともに環境、観光等に対応したコースを取り入れて、魅力ある高校づくりに努めるということが3点目でございます。

最後の4点目といたしまして、特色と魅力ある教育課程が生徒のニーズに応えられるようにじゅうぶんな教員配置を行うといったことでございます。

以上4点が、私ども飯水岳北4市村の首長会として提案をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。以上でございます。

(中村委員長)

ありがとうございました。それでは委員の皆さん、何か疑問点等ご質問がありましたら、お願いいたします。

(丸山委員)

ポイントになるところは、25年まで普通科を2つ維持してほしいということだと思いますが、これは具体的には飯山南高と飯山北高ということですね。

(木内飯山市長)

それはまだわかりません。

(丸山委員)

それはわかりませんか。

それから3番目の、下高井農林の問題ですが、農林は資料のように書かれているのですが、「農業科」という形で発展させていくのか、それともほかの案といたしますか、考えがあるのか、どうでしょう。

(木内飯山市長)

資料に記載のあるとおり農業林業とありますが、現在いろいろな形の科があるわけですが、その中でまたそこに新しく環境問題や観光等に対応したコースも取り入れて、幅広い形での専門高校づくりに努めていただきたいと、そういう案でございます。

(中村委員長)

ほかにございますでしょうか。

飯水岳北地区では、かなり長い期間にわたってご検討されてきた結果だと思いますが、まだまとめには至っていないということで、これは実施はすぐにできそうとお考えでしょうか。このような再編整備を行う上では、県の教育委員会の日程が示されておりますが、それに載せることができるであろうというご判断は頂けるのでしょうか。

(木内飯山市長)

私ども、その中でも2校というような形を出してありますもので、その辺がちょっと県の提案とはちょっと違うということでございます。

(中村委員長)

ほかにございますでしょうか。

(清水委員)

ひとつお尋ねします。2番の です。平成25年までは2校とする。その間に新しい高校づくりを地域とともに行うと。この「新しい高校づくり」というのは、例えば具体的にどんなようなことをお考えですか。

(木内飯山市長)

普通科高校3校を1つにするということでございますので、普通科高校という形での統合ということでございます。特に新しいということは、普通科高校の中でということになります。

(清水委員)

では、25年までは2校とすると書いてありますが、それ以降については1校をとということを視野に入れておられるということですか。

(木内飯山市長)

これは書いてあるとおりでございます。3校を1校に統合するということでございます。

(清水委員)

はい、わかりました。

(中村委員長)

ほかにございますでしょうか。

(坂口委員)

この提案は首長会ということで、一番最初にあったやにもお聞きしたんですが、地域住民あるいはもっと幅広い中学、高校、そういったところとの意見の調整、あるいは整合性というか、そういったものについてはいかがでしょうか。

(木内飯山市長)

私ども、飯水岳北の高校の将来を考える会ということで、ずっと8月以来やってきましたが、その中でいろいろな立場方からいろいろなご意見が出ました。それを統合する形で、首長会で統一案という形で、これを考える会の全体会議にかけたわけですが、いろいろなご意見が出る中で、統一案は非常に難しいということで、断念をしたところでございます。

義務教育関係者やさまざまな方からのいろいろな形のご意見を、それぞれ総合する中で、こういった提案を私どもはさせていただいたということでございます。

（宮本委員）

2番目の「3校を1校に統合する」とありますが、県教委から具体的な名前について候補案が出ていますが、それについてはどうお考えでしょうか。

（木内飯山市長）

具体的な名前ですか。

（宮本委員）

具体的な、統合する高校の名前が出ていますが、その案について今回の場合には具体的に出ていませんが、それに関連してどうお考えでしょうか。

（木内飯山市長）

私どもは今ある市内の普通科高校3校を、将来的には1校にするということで、提案はしているところです。

（宮本委員）

どの高校の敷地を使うとか、場所についてはお考えはありますか。

（木内飯山市長）

県の提案もありますが、そういったことを勘案する中で、これは考えていきたいなと思っております。

（牧 委員）

下高井農林高校の基幹産業である、農林業の発展のためにということで謳っており、また新たな専門性を高めて環境や、観光についての記載もありますが、非常に高度な部分というのは、環境問題や観光ということについてはたして高校生レベルでいけるのかどうか。

実際に子どもたち、基幹産業である農林業に、学校を卒業してお勤めされているのかどうか、あるいは自営でやっていらっしゃるのかどうなのか。例えば須坂の須坂園芸高校の例を申し上げますと、実際に園芸高校を出て、農業、園芸に携わっている人は少ないですよ。どちらかと二次産業に携わる方のほうが多いような実態の今の高校生の卒業の中身です。あるいは進学をして、また新たに就職をすると。この3番目の農林高校の意義というのに対して実際に内容についてはいかがですか。

（木内飯山市長）

ご指摘のように、卒業してすぐ農業に就くという生徒は非常に減っております。ですがそういったいろいろなコース、選択を中学生にも与えていくと。すぐ農業等に就くということではなくて、ひとつのコースとしてそういったものもあってはいいのではないかなと、

そういう思いでございます。

その中で環境とか観光等、こういったコースについても検討していったほしいと、こういう気持ちでございます。

（牧 委員）

飯山地区は本当に農林が基幹産業なんですか。この辺のところをお願いします。

（木内飯山市長）

ええ、基幹は基幹です。

（牧 委員）

今の子どもたちにとってはいかがですか。

（木内飯山市長）

現況は別としましてね。子どもたちにとっての基幹ですか。

（牧 委員）

子どもたちの、次の未来にとってはということでお聞きしていますが。

（木内飯山市長）

それは先ほど申し上げましたが、高校を卒業してすぐに農業に就くという形は、非常に少ないということでございます。

（牧 委員）

はい、わかりました。

（中村委員長）

ありがとうございました。

次のご発表に移らせていただきます。

「長野県高等学校改革プラン第一推進委員会への提案資料」ということで、ご発表は高藤崇夫さま。よろしくお願いします。

（飯山南高校：高藤）

飯山南高校に勤めております、高藤と申します。よろしくお願いします。

私たちは、長野県高等学校教職員組合の高水支部ということで、私は今年支部の書記長をやっております。今、首長さんたちの案でご説明いただいたことと重なる部分がありますので、事務局からも短時間でと要請されておりますので、すべては読みませんがよろしくお願いします。

私たちは毎日生徒と、高校の現場で接しているわけですが、そういう立場にある者として統合された場合の具体的な姿を考えないではいられません。

もちろん統合に伴うさまざまな課題があるわけで、そういうものをできるだけ解決して、いこうと工夫する、あるいは努力をする、そういうことを行うにはやぶさかではありませんが、しかし現在県教委で示されている案でいい吗と、私たちの努力だけではもうどうしようもない部分があると思います。

それが普通科3校を1校に統合することですが、同じ高校の生徒が1つの校舎に入りきれないということで、2つの校舎を使うと。いずれ子どもが減ったり、あるいは校舎改築等がすんだ段階で、飯山北高の校舎を使うとなっているわけですが、当面使うという2つの校舎、実際には北と南というふうに言われていますが、間が3キロメートルも離れているという現状があります。

それからご存じのように豪雪地帯である、交通の便も悪いというような中で考えますと、やっぱり段階的に統合を進めていくと。飯山地区は今4校ありますが、いずれも小規模になっていますので統合しなければならないということは、もう前から考えているところで、すし、今までも県の教育委員会ともその話をしてきたところです。

そういうようなことで、そこに3ページ目の一番最初の提案内容に書きましたように、段階的に統合を進めていくのは適当であると。総学級数9までの期間は3校とする。具体的には照丘高校と南を統合し、あとの2校をそのまま存続する。9学級が維持できなくなった時点では2校に統合するというので、この間に今までじゅうぶんに地域で高校問題について語ってくるという機会がありませんでしたので、望ましい在り方をこの間に考えていくということです。

その場合に、私どもは農林高校も含めて、この先どうあったらいいのだろうかということをいうことを考えていきたいということです。説明のほうは、資料をご覧いただきたいと思いますが、4ページ目の頭のところでその間に検討する中身ということで、具体的に現状専門学科は理数科、体育科、農業科があるわけですが、例えばいずれ平成31年には、県教委のそれでは6学級ということがありますので、将来的には1校というようなことも考えざるを得ないようなことになってくると思いますが、その際に、現在の学科をそのまま維持するのがいいのか、というようなことも含めて検討していく必要があるのではないかと思います。そのときに欠かせないのは、やはり校舎改築で、1校で子どもたちが学べるという体制をつくっていただきたいということです。

のところは、先ほど照丘と南を統合する際にうんぬんということで、その説明です。4番目ですが、県の教育委員会ではこの形はジョイント高校ではないと。ともすれば校舎制というようなことになるかと思うんですが。これは検討委員会の最終報告書にも記述がありませんし、長野県でも今まで行われたことがありません。

しかも先ほど申し上げた、飯山市のそこを以下に具体的に書いてありますのでご覧いただきたいのですが、生徒たちにとって学習と並んで部活動とか生徒会活動というのは、高校時代の生徒の青春にとって、うんと大事な働きをするものだと思いますが、2つの校舎に分かれているということで、移動がかなり難しいと。特に、冬期間ほんとに大変になりますので、しかも学んでいる同一学年の生徒も一堂に会するということができないわけですよ。

従って連帯感とか一体感などが持てないと。そういう具体的な場面を考えますと、私たちはやっぱり段階的に進めていっていただきたいということで、最初書きましたような形

でご提案を申し上げますので、よろしくお願いします。

（中村委員長）

委員の皆さま、伺いたいことがあればお願いいたします。

（青木委員）

今、1つずつの記述でありますから、この提案に対してだけ質問するのは正しいのかどうか分かりませんが、先ほどの提案とこの提案と、一番根本的に違うのはどの点なのかということが、ちょっとわかりにくいので、最初の発表者にご質問せずに、2番目の発表者へ質問するのということが、もし委員長さん、それでよろしければお伺いしたいのですが。

（中村委員長）

大丈夫だと思います。そこをお答えいただいて、もしコメントしていただけるようであれば、最初の一番目の方にもう一度お願いしたいと思います。

（飯山南高校：高藤）

私たちは、そこに提案内容で挙げました。これは先ほどお話がありました「考える会」に、それぞれの組織の意見を持ち寄っていることで、これを出しました。当初考える会の事務局案では、やはり2校で当面いくということでしたが、具体的な年度を区切ってとか、そういうことは考える会のたたき台にはありませんでした。

私たちが挙げる中で、今四首長さんのほうで原案を作っていて、今の25年9学級ということを入れていただいたということだと思います。私たちは、9学級というのは今申し上げた3校にしたときに、今年度の学級数がちょうど9学級なんです。飯山北が4学級、飯山南が3学級、農林が2学級ということで、そこまではこの体制でいけるんじゃないかという、そういうことで9学級までは、ということ考えています。

（中村委員長）

木内さん、もしコメントがあれば、今のお答えでよろしいでしょうか。

（木内飯山市長）

はい。今、おっしゃられたとおりです。

（中村委員長）

ほかにありますでしょうか。青木委員、よろしいでしょうか。

（青木委員）

あんまり違いがよくわかりませんが、要は段階的にというのは共通しているような気がするんです。

(中村委員長)

たぶん2校舎を使うというところが、非常に大きな課題であると思います。それを何とか解消したいということではないでしょうか。

(飯山南高校：高藤)

現場にいと、一番それが問題があると思います。

(中村委員長)

ほかにございますでしょうか。

(小山(壽)委員)

もうひとつ違いがあるのが3番のところで、この間に下高井農林高校で地域として望ましい高校の在り方を検討していくというところだと思います。

つまり4つの市村の首長さんたちの考えは、農林は手付かずずっとやってきたと。これをそちらのほうの案は、状況によっては普通科2校存続もあり得るよと、こういうふうに言っておりますね。

(中村委員長)

ほかにございますでしょうか。

なければ、ほぼ時間ですのでよろしいですか。どうもありがとうございました。

続きまして、「地域との共同によって築かれるべき「確かな未来」を、飯山を中心とする県北地域のあるべき高校像を求めて」ということで、ご発表は森司朗さん、お願いします。

(飯山北高校同窓会：森)

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました、飯山北高等学校の同窓会を桂蔭会と呼んでおりますが、その会長を仰せ付かっております森司朗であります。

今日は大変いい機会をおつくりいただきまして、まずもって御礼を申し上げたいと思います。5分という時間でございまして、なかなか全般的な説明はできないかと思っておりますので、基本的な部分だけ申し述べて、またご質問があれば質問にお答えしてまいりたいと思っております。

私ども6月の上旬に桂蔭会の諮問機関として、特別委員会を立ち上げ、今日まで8回の委員会が開催されてまいりました。公開学習講座、そして現地視察、さらには中高一貫教育の勉強会なども実施をいたしてまいりまして、最終的に皆さんのお手元に配布されたようなことでまとめてまいりました。

ただまだ中間報告の段階でございますので、さらに今後細部について詰めていかなければならないと、こういうふうに思っております。基本的には3校を1校にしていこうということ、そして将来は下高井農林を含めていきたいと、こういう考え方で実は中間報告がされているわけです。

特に私ども、大変頭を痛めたことは、魅力ある高校づくりというのはいかなるものなのかという点で、大変悩みました。魅力ある高校づくりというのは、いったい何なのかとい

うことで大変悩んだわけでございます。

私どもの一番シンボルになっていることは、やっぱりこの際中高一貫教育をどうしても導入していくべきではないのか。地域の皆さんにご支援をいただいて、導入をしていきたい、こういうふうを考えて一番最後に提案をさせていただいているわけであります。

全国的には既に平成 11 年 4 月 1 日から実施に移されているわけですし、既に 18 年度の予定では全国では 222 校決定をいたしております。3 つのタイプがあるわけでありますが、最後に書いてありますように県立付属としてぜひ考えたいと考えておりまして、文科省でも将来的には 500 通学区、つまり高校通学区が全国で約 500 あるようですが、将来的には 500 ぐらいの通学区に中高一貫を導入したいという考え方を持っているようであります。

残念ながら長野県ではまだ、中高一貫教育というのは私立では佐久長聖や長野日大で行われておりますが、長野県の県立としてはまだ残念ながら導入はされておられません。特に各全国都道府県の未導入の都道府県に電話で調査をしてまいりましたが、長野県と富山県だけ中高一貫導入を決めておりません。

そのほかは、大体 20 年ごろまでにはほぼ中高一貫が導入されるのではないかという、こういう実態になっておりますことも、ご報告を申し上げておきたいというふうに思っております。

さらにもうひとつは、今回の特別委員会の議論のベースになっている資料の関係については、特に小学校の父兄の方々、保護者の方々、中学校の保護者の方々のアンケート調査なども実施しまして、そういう動向もベースにした上で今回の中間報告の決定を報告させていただきます。こういうことでございますので、後ほどまたご質問があればお答えしてまいりたいと思います。

以上です。

(中村委員長)

ありがとうございました。委員の皆さまからお願いします。

(丸山委員)

飯山地区は 3 つ出ていまして、特に 2 番目の提案の中で県教委が言っている北と南の校舎を統合に使うという、1 つの学校にするけれども使うということに対して、それは非常に困難であると現場からの指摘がありますね。

それについては、今の提案の方のほうではどういうふうにお考えなのか。これを一遍に 1 つにしてしまうということについてですね。それからもうひとつ、中高一貫ですが、ちょっと疑問があるんですが、県立の併設中学ですね。では市立の今ある中学との関係はどうなるのか。それから次世代のリーダー育成というふうに書いてありますが、その中身は何か。その辺をお聞きしたい。

(飯山北高校同窓会：森)

校舎の関係についてまず最初に申し上げます。大枠に 2 校を 1 校にするということですから、残念ながらまだ中間の段階ですので、校舎をどこ使うということについては、まだ残念ながら特別委員会では議論をしてございません。そういうことで、ご理解をいただき

たいと思います。

次世代のリーダーの育成についてのご質問がございました。これは私どもはいろいろ議論をさせていただいたわけなんです、特にキャリア教育との関連もございまして、特に大学や企業、地域との連携、協働による、そういう職業観というのをやはり学校生活の中で体験させるべきではないのかという、そういう観点で、こういう確かな未来をつくろうという次代のリーダーを育てていこうという、こういうふうにまとめさせていただきました。

特にP連のアンケートでは、地域を担う次代リーダーの育成を高校改革を考えるので重要な要素として、とても重要であるという考え方が小学校では44パーセント、中学校では41パーセントに達しておりまして、そういう保護者の意識を踏まえながら、これからのリーダー育成に力点を置いたキャリア教育というものを考えていくべきではないのかと、そういうふう考えておりますので、ご理解をいただきたいと思います。

それから中高一貫教育についてのご質問がございましたが、これは併設ですから設置者が長野県ということになります。原則的には地域の、例えば市町村、関係教育委員会に大変ご理解をいただかないと、なかなかできていかないわけでありまして、そこにも書いてございますように、私どもとすれば地域の皆さんにもぜひご協力をいただいて、中高一貫教育の導入を進めてまいりたい、このように実は考えておりますので、ご理解いただければありがたいと思います。

以上です。

(中村委員長)

丸山委員、よろしいですか。

(丸山委員)

いろいろありますが、時間がないですから結構です。

(中村委員長)

ほかに、ご質問がありましたら。

(牧 委員)

下高井農林の関係のお話ですが、全国的に農林関係の重視する方が年々減っておりまして、高等学校の運営方法の説明意義が高いと思いますが、本来であればもっともっと長野県の場合は、こういう高校を育てていかなければいけないという部分もあると思いますが、現実的にさっきもお話ししましたが、農林高校の可能性に注目するんだという内容がありますが、ちょっとその謳われているものは何でしょうか、ちょっとお話を聞きたいです。

（飯山北高校同窓会：森）

先ほどもご質問の内容を聞いておりまして、私どもは地域産業との関連で報告をさせていただいているわけでありまして、ひとつはやっぱりこの農業体験で申し上げますと、グリーンツーリズムですね。もうひとつはバイオマス、エネルギー、この形、ブランド農業のそういう展開がこれから想定されるのではないかというふうに見ているんです。断定はしていないんです。そういう想定をされるのではないかという意味で、可能性に注目すべきだというふうにまとめてありますので、そういう点でご理解いただければありがたいと思うんです。

（中村委員長）

ほかにございますでしょうか。

（塚田委員）

簡単にですが、同窓会でこのように委員会を設けて報告書など作られて大変すばらしいと思うんですが、今回飯山北高のほうからのこのような報告を出されていますが、飯山南高、それから照丘の同窓会とも、同窓会レベルで検討されていく予定はありますか。

（飯山北高校同窓会：森）

私が桂蔭会長になったのは、平成 15 年の 10 月です。それ以降に高校改革問題は、当然近い将来に浮上してくるだろうという前提に立ちまして、4 校長、同窓会長の会議を何回も開きました。

それぞれ最終的に今年の 2 月 24 日、4 校長、4 同窓会長、4 P T A 会長のお集まりの中で、それぞれの同窓会や P T A で、独自に検討していこうという話にまとまりまして、まだ最終報告を出される前の段階でしたので、私ども北高とすればそういう 2.24 懇談会の決定を受けて、6 月に先ほど報告を申し上げましたように桂蔭会としての諮問機関として特別委員会を立ち上げたと、こういうことになっておりますので、それぞれ照丘にしても、あるいは下高井農林高校にしても、南高にしても、それぞれの立場で今、検討されているのではないかと考えております。

（中村委員長）

それでは時間ですので、どうもありがとうございました。

続きまして 4 番目のご発表、「高校改革プラン第一推進委員会への提案」というタイトルで、原修一郎さま、お願いいたします。

（中野実業高校同窓会長：原）

私は、中野実業高校の同窓会の会長をやっておりまして、中野市内高校問題を考える懇談会の座長をさせていただいております。

趣旨等につきましては、お手元にそれぞれ資料が配ってあると思いますが、私のほうで大ざっぱに申し上げますと、県は高校改革を進めるに当たって、結果として高校改革プランを自身を俎上（そじょう）に上がった高校の問題として矮小化し、広範な議論を巻き起

こすことの困難な状況を生み出していることは、誠に遺憾なことだと考えます。

中野市内3高校の在り方について、県当局の提案を傍観することなく市民の意見を聞くため、懇談会や実行委員会を設け、「1 3校存続」、「2 総合学科高校を中野市外に」、「3 総合学科高校を受け入れる」、この3つの考え方を基に、どれを目指すのかいいか、これまで高校問題を考える懇談会ならびに中野市内高校の在り方を考える市民会議実行委員会において、協議ならびに学習を行ってまいりました。

その結果私たちは、県教育委員会の提案を真摯（しんし）に受け止めていくのがよいと考えました。それと同時に私たちは、高校問題は県に任せておけばよいというような消極的な態度のままに、高校に対する認識や理解の浅さに思いを致すようになりました。

そして県が示す高校再編案は、将来の子どもたちにどういう教育の場を提供できるか、重要な指摘が含まれているとの認識に立つことが大切と考えようになりました。こうした状況の中で、新しい時代への高校教育の在り方も含め、県教育委員会の説明、講師を招いての学習会ならびに県外高校の実態視察等をしたところです。

その結果、これまでの反省を含め、この地域が求める高校について、「県の再編案を受け止め、総合学科高校を受け入れる」という選択を、前向きに見ていけばどうかという意見も出てまいりました。

高校問題を考える懇談会では、第一推進委員会の検討の意見を述べる機会があるということから、地域が求めている高校について県の再編案を受け止め、子どもたちにとって必要な高校をすることが大切という意見により、これからの中野市内高校の在り方のひとつに、総合学科高校は必要ではないだろうかという意見が出、単に中野市内の高校を統合し、新たに総合学科高校をつくるということだけにとらわれず、地域が高校に期待するものは何か見極め、地域に即した高校を求めていく必要があり、その内容を推進委員会において検討していただけるような提示をすることが重要であると考えました。

そこで県の再編案に挙げられている、中野高校と中野実業高校を統合して、総合学科高校という案について、次のように提言します。中野地域が求める高校は、幅広く社会に資する、活躍するために進学を目指すことに主眼を置く普通科高校と、進学の門戸を開きつつキャリア教育を身に着けて地域社会に貢献する人材育成を目指す総合学科高校と考えます。

こうしたことから、進学を目指す中野西高は、今まで以上に充実発展させることが必要であると考えられます。その上に立って、私たち希望する新たな総合学科高校は、生徒の個性や適正を伸ばすために意欲ある有能な教員の配置が絶対必要であり、同時に学校運営に地域も協働で責任を負い学校を支えていく心構えを持たなければならないと考えております。

また学校は、地域の要望に応える努力が必要で、その観点から学校運営協議会のようなものを設置することを検討する必要があると考えます。総合学科高校の要となる系列を考えると、普通教育課程を重視した基礎学力の上に、これまでの中野実業高校の専門教育と、中野高校のコース制を発展させ、キャリア教育の実績等を踏まえ一層充実させる系列選択制を取り入れた、長野県のモデルとなる総合学科高校としていきたい。

なお私たちは、これからの高校の在り方について広く市民の意見を聞こうと、市民会議を開くことに実行委員会を設け、協議し、市民会議を開いてまいりましたが、実行委員会

および市民会議においては、県の案とは別の総合学科高校について、総合学科高校の疑問点、問題点を掲げた意見、養護学校の定員増加、生涯教育を考慮して、拙速な結論を出すべきではない等々さまざまな意見が出て1つの意見にまとまりませんでした。

市民会議は市民の意見を聞くということから、地域が高校について考えるという意味では、大変意義があったと感じております。つきましては、こうした背景を考慮していただき、高校改革を進めていただきたいと思います。

以上が、私ども懇談会としてまとめた高校でございますので、ご意見、ご指導を賜ればありがたい。

（中村委員長）

ありがとうございます。委員の皆さん、ご質問等ありましたら、お願いいたします。

（小山（元）委員）

ひとつお尋ねしますが、総合学科というのは今までの第1通学区と違ひまして、普通科の統合とは違ひますし、総合学科のことですので、その総合学科の内容について地域に皆さん、特に中学生および保護者の皆さん方の理解というのは、どのようなものであるか、その点お聞きしたいと思います。

（中野実業高校同窓会：原）

私どもも、総合学科高校については勉強をいたしましたが、コース、系列等の選択についてはまだ深く立ち入っておりません。いろいろな希望の中では、例えば農業も重要視してほしいとか、いわゆる観光関係のコースについても考えてほしいと、そんなような希望意見は出ておりますが、この辺の方向付けについては、まだ時間があるではないかと。

その間にそれを整備しながら、また勉強しながら方向を決めていきたいと、こんなふうな意見でございます。

（丸山委員）

私も中野地区ですが、この推進委員会の中で私は総合学科についての疑問点、問題点をいつも発言をしてきました。たくさんあるのですが、そのうちの中で私が心配しているのは2つです。

中実の工業科がなくなることの地域でのデメリットですね。長野工業しかなくなってしまう。これについては地域の皆さんは、どうお考えなのか。どういう議論があったのか。それからもうひとつは、総合学科で、いい学校をつくれればつくるほど、結局広い地域から希望者が殺到すると思います。その場合、地元でそこに入れない子どもたちが、行き場をなくすのではないかと心配を持っています。まだたくさん総合学科について、私は疑問を持っていますが、その2つについてどういう議論が実行委員会や懇談会でなされたのかお聞きしたい。

(中野実業高校同窓会：原)

今、最初の問題につきましては、先ほど別途申し上げましたように、まだまだ選択はこれからで間に合うという中で、私ども地元としても検討しながら方向付けをしていきたいということの段階でございます。

それから、いわゆる地域外からの流入が多くて地元の生徒が押し出されるというようなご指摘でございますが、この点については深い統計等々持った議論はしておりません。しかしながらやはり地域の学校として、地域一体がそれによって発展的、また生徒の学力が上がるということであれば、それもなお結構ではないかと、私は思います。

(中村委員長)

よろしいでしょうか。もう時間ですが。まだありますか、よろしいでしょうか。どうもありがとうございました。

(中野実業高校同窓会：原)

よろしくお願いします。

(中村委員長)

それでは5番目のご発表で、「中野地区3高校を再構築し、魅力ある高校教育を実現するための試案」、ご発表は小林東一郎さま。

お願いいたします。

(中野高校同窓会：小林)

中野高校同窓会の常任理事をしております、小林東一郎と申します。よろしくお願いいたします。

今回の6月24日に示されました県立高校再編整備候補案への見解は、既に中野高校同窓会という名前で第一推進委員会へは見解を示しております。皆さんご覧になっていただけたかなと思っております。中野高校同窓会としましては、母校の存続とますますの発展を願うものであります。

しかしながら、少子化の影響による高校数の削減は免れないと思われれます。ただし今回の改革案は高校数を減らすのみが主題でありまして、長野県の高校教育の在り方を示す理念が欠落しているように思われれます。高校教育は地域づくりと密接につながるものであって、改革にあたっては地域の希望を学校づくりに反映させてほしいと思われれます。

先般10月26日に開かれました第10回の第一推進委員会では、多くの委員の皆さんが中野高校と中野実業高校の統合による、新たな総合学科高校の設置を了承という報道がなされました。総合学科高校をつくるのであれば、お手元の資料の一案をごらんいただければと思います。

一案のように、大規模な学校をつくっていただいて、地域で学び得るすべての学びをこの1つの学校で網羅するような学校にしていきたいと思います。モデルとしますれば、埼玉県立伊奈学園総合高校。これは1学年の定員が840名という大規模校であります。

今の3校の定員を総合しましてもそこまではいかないんですが、伊奈学園をモデルにし

ていただいて、そういう総合学科高校になれば非常におもしろい展開ができるのではないかなと思っています。

続きまして第2案ですが、一番最後の資料をご覧くださいなのですが、平成16年および平成17年度の入試結果であります。この結果を見ていただきますと、旧第2通学区におきましては、普通科高校の3校、中野高校、須坂東高校、須坂高校のみが定員よりもいっぱいの子の応募があって、2年間ともに定員を満たしている高校であります。

それ以外の3校は、定員割れをしたり、それ以外の学校は厳しい状況に置かれているなと思います。それから17年度の資料がちょっとございませんでわからないのですが、16年度の高校別入学者の状況を見ますと、中野、山ノ内地域の出身者で普通科高校へ入学した数が355であります。職業科へは162名であります。この辺を見ていただきますと、普通科への志望が非常に強いんだなということがわかりいただけるのではないかなと思います。

この普通科への志望を重く受け止めていただきますと、第2案に掲げましたような中野高校と中野西高校の普通科同士の統合と、これが考えられるのではないかなと思います。今、総合学科の高校がだいぶ取りざたされておりますが、普通科でできる、限りなく総合学科に近いような形の、いろいろな啓発活動、それから進学への動機付け、そういったものを網羅できるような、この地域の子どもをぜひ伸ばすような普通科高校の充実を図っていけるのではないかなと思います。

中野実高につきましては、中野高校の福祉コース、ビジネス教養コース等に移管しまして、職業系の総合学科高校として実高の校舎を使って、総合学科の高校にしていければいいのかなと思います。

試案3としまして、これは11ページですね。2段落目からになります。地域の社会活動と学校教育との接点として、また高校入試制度を模索する意味からも中野高校に中高一貫校を。宮崎県五ヶ瀬にあります中等教育学校という、中学校でもない高等学校でもないという学校であります。こんなような学校をつくっていただいて、社会教育との接点をつくっていただけるかと思います。

最後に候補案のように統合した場合を検証いたします。前述のようにこの地域では普通科への進学志向が強い。また全国に設置されている総合学科高校のうち、約20パーセントが他学科との併設校であります。そういう組み合わせも考えられますので、ぜひ普通科をもし県教委案のように統合するのであれば、普通科2クラス程度お残しいたいて、今、西高は非常に理系が弱い学校ですので、理系の進学コースのようなものを設置をしていたいただければと思います。

以上のように、1、2、3を示しまして、県教委案にも論述をいたしました。魅力ある高校をつくっていくためには、高校を卒業していく若者に対して、どのような資質を地域が求めているのかを、まず明らかにしなければならないでしょう。

地域おこしと人づくりは一体の関係にあり、さらに踏み込んで若者の就労の場を提供し、地域社会に参加を促すための条件整備についても考えなくてははいけない。その上で、現在の市内3高校の状況を分析し、地域づくりにふさわしい高校教育のビジョンを見いだしていくべきだろう。

このような論点にたって検討を進めていくべきなんだろうなと思いますが、いかんせん

時間がございません。県教委がこの再編整備候補案を出すのに2年間かけて練られてきたというふうに伺っております。

そうであればせめてあと2年、19年度からの実施ではなくて20年度以降の実施という形で地域の要望をぜひ聞いていただいて、再編整備案、地域の要望を取り入れたものにしていただきたいと思います。

以上です。

(中村委員長)

ありがとうございました。

委員の皆さん、ご質問等ありましたらお願いします。

3つご提案ですが、これはどれがいいかというか、その判断基準も含めてお聞きしたいんですが、今最後のところでご説明いただいた下から9行目からですかね。ここはやはりこういうことを検討しながら1、2、3どれかをということでしょうか。

(中野高校同窓会：小林)

3案示しましたが、私どもが決めるわけではございませんので、いろいろなものが考えられるということで提案いたしました。ただ中野高校が普通科の高校であるということを考えますと、やはり地域の普通科高校の充実ということになると、2案が最もふさわしいのではないかなと思います。

ただ、1案も非常に魅力のある考え方だろうとは思っています。

(中村委員長)

総合学科の、例えばこの14クラス規模のものは、非常に盛りだくさんの。ここでは普通科の目的は、ここでは達成できないというお考えですか。普通科はあくまで普通科として単独であるべきだということですか。

(中野高校同窓会：小林)

進学という系列で、ここには一応載せてみましたが、できますればこの中に普通科があってもいいのではないかなと思います。この系列という、総合学科という枠ではなくて、普通科という、先ほど中野高校と中野実業高校の統合のときにも話しましたが、それと同様の形で、普通科という枠が総合学科と別にあってもいいのではないかなと思います。

(中村委員長)

ありがとうございます。

ほかにございますでしょうか。若干時間がありますが。

よろしいでしょうか。それではありがとうございました。

それでは続きまして2区の最後ですが、6番目のご発表で、「長野県高等学校改革プラン第一推進委員会への提案」ということで、馬島直樹さま、お願いします。

(中野市の高校教育を考える会：真島)

私は、全国教育研究集会や長野県教育研究集会で、教育課程、生活指導、総合学習などの分科会の世話人とか共同研究授業等を務めてきた者であります。

結論を先申し上げますと、中野高校と中野実業高校を再編して総合学科高校を発足させるという案には疑問点、問題点が非常に多くあります。そこで拙速に結論を出すべきではないというのがひとつ。

もうひとつは中野高校と中野実業高校は近接しており、再編するならジョイントし2校の校舎施設を生かすべきである。中野実業高校の校舎施設だけでは、理念どおりの総合学科高校にはなり得ない。これが結論的なものであります。時間ある限り発表させていただきますと、まず1番であります。戦後60年近い高校の歴史の中で、総合制高校は戦後教育改革以来何度も提起されましたが、強い疑問や反論が多く、総合制教育はそのまま理念が実戦的に検証された意向になっています。

いろいろ案が出るんですが、デメリットがあまりに多過ぎる。それから特に実業高校関係の関係者から強い反論があって、その都度これは評価されずに今日に至っているということがあります。

2番目に、総合学科高校は選択幅が広がり、教室数が多数必要。これは常識であります。中野実業高校の教室数で間に合うとは思えない。地域総合高校の理念を生かされた経験は日本にはあまりなくて、アメリカ、イギリス、スウェーデンなどにその経験があるわけですが、いずれもマンモス校にならざるを得ない状態です。

わが国の高校のような、小規模な高校の実態とはかなり懸け離れたものであったというふうに言われております。現在の教育科学事典で、私が関係している教育科学研究会、国土社から教育に関して出ていますが、それを研究者が中心になって研究したものであります。

3番目に、私が手にした素案であります。各選択系列を作るための具体的内容というのが、その中に囲んだ中にあります。誠に結構内容ができてきております。これは今、総合的な学習の時間にやってもいいような、魅力的な案があります。しかしそれをどう具体化するかということに問題があります。(1)(2)(3)は略します。

4番目ですが、これは私たちが懇意にしている愛知県民教育研究所から頂いた資料であります。「これでわかる愛知高校入試Q & A」というところから引用したものであります。総合学科高校の実態を見ると、この科目を取っておかないと進学できないとか、選択科目の組み合わせが限られてしまうなどという問題が生じています。

また選択したくても希望者が少なく、成立しなかったり、設備が不足していたり、専門の先生に恵まれないということもあるということである。以下、心配されるデメリットを(1)(2)5番、6番、7番というふうに書きました。

8番ですが、総合学科高校は地域総合高校として、中野の地域に根差し、中野の地域に意義ある高校になってほしいと思います。そしてデュアルシステム(これは産業現場での就業体験と学校での授業を併用して学習する職業教育の仕組みであります)これを積極的に導入してほしいと思います。

既に中野高校、中野西高もですが取り組みがなされていますが、デュアルシステムは他の長野県内のどの高校でも導入してほしいと思います。ただ地域総合高校は、小学区制の

中でこそ役割を果たす性格のものでありまして、大学区制の中での総合学科高校といのは、いろいろと難しい面があります。

以下 9、10 とありますが、11 番、中野高校と中野実業高校を再編して総合学科高校を新設する場合、これは略します。2 つの学校をジョイントすることが大事だということを言いたいわけですが、私どもの研究会で特に出されたのは、切実な声で出されたのは 12 番であります。

大学区制の中で、中野市に見栄えのする総合学科高校が新設されるとすると、広範囲から生徒が集まってきます。するとその分、市内の中学校卒業生は市外の高校へ遠距離通学をせざるを得なくなります。遠距離通学には時間がかかるだけでなく、費用がかさみます。

特にここが問題なんです、長野電鉄の電車とバスの乗車券は非常に高い。私が長野へ来るのに千円札を出して、片道 20 円のおつりがくるだけです。授業料の滞納や、授業料免除の家庭がどんどん増えている中で、高校進学がままならない生徒が出てくる。その生徒たちの進路を、誰が保証してくれるんだろうか。行き場のない母子家庭の子ども。貧乏人は、高等学校へ行くなということになっていいのかということであります。これは、多くの人から言われました。

13 番もあります。吉江高校課長さんの話の中で非常に気になることがありましたが、大規模校の 40 人の学級の中で、競争原理に基づく、そして切磋琢磨（せっさたくま）する必要があるというような話がありましたが、これは世界に通用する教育原理ではありません。30 人、35 人学級を目指すべきものなんです。競争原理ではなくて、協同の原理こそ大切にしてほしいということであります。

もう時間が過ぎておりますが、プロジェクトチームで活躍できる子どもを育成するためには、競争原理ではなく協同、協力の教育原理を長野県は前面に出すべきである。もう時間が来ていますが、高校教育課は具体的な提案を出してからみんなの意見を聞くべきです。「こういう時間割になりますよ、こういうカリキュラムになりますよ」と、そういうことを出さずにここで結論を出さないでほしいと思います。

大筋は、小林東一郎さんの意見に私は賛成しております。以上です。

（中村委員長）

ありがとうございました。

委員の皆さん、ご質問等ありましたらお願いします。

（丸山委員）

もし総合学科、統廃合で総合学科になるというときに、例えば中野高校の校舎を使うという、そういう話がありました。私も中野高校ですので、近いから使えると思うんですが、そのイメージをもう少し説明してもらえますかね。

（中野市の高校教育を考える会：真島）

非常に近いんですね。大学のキャンパスなんかだと、行ったり来たりできるような距離にあります。

部活動などは、両方遣えばいいと思うんです。実験室もあるし、音楽室も、あらゆる施

設も使える。いったい先生も、例えば生物の先生が、中野と両方掛け持ちでもいいと思うんですね。

私は旧制長野中学で4学級だったけれど、生物の先生もいれば地学の先生もいれば、物理、化学、東洋史、西洋史、みんなそろっていましたね。今そういうのが無理だとするならば、2つの高校で行ったり来たりして、中野実業高校では工業系、商業系の総合学科を得意として、中野高校や中野西高等学校は、それ以外の実業関係じゃない総合学科を得意とする。そしてそれぞれの先生方が、役割を果たす。

今、地域高校といわれる学校では、総合的な学習が進んでおります。そこからいい先生を引っこ抜いてきて、中野へみんな持って来るといわけにはいかないと思うんですね。いい、力のある先生が引っこ抜かれちゃったら、地域高校が成り立たなくなりますね。残念ながら、長野県の高校の先生は、総合学習について不得意ですね。今、まだ。地域高校にいい先生はいっぱいいますけど、そういう中でやっぱり中野高校の先生の良さを生かして、実高の先生の良さを生かして、それができますよということであれば、市民の信頼は得られると思うんですね。

(中村委員長)

ほかにございますか。

(青木委員)

今、真島さんがおっしゃった言葉の中に、「いい先生」という表現がありますけど、真島さんが考える「いい先生、良くない先生」というのはどんなことでしょうか。

(中野市の高校教育を考える会：真島)

いい先生は、子どもの名前と顔が合って、いつも子どもに声をかけられる先生。総合学科高校はそれが不得意なんですね。それから「愛されている」という実感を、子どもに与えられる先生ですね。「私はあの先生から愛されているんだ」という実感を子どもに与えられるような先生。それは大規模校では無理だと、私は思っています。

(青木委員)

それは先生1人1人の資質の問題であって、「地域高校であるから」また「総合学科高校であるから」ということでは、私はないと思います。

(中野市の高校教育を考える会：真島)

いや、総合学科高校というのは、それを不得意とする学校なんです。

(青木委員)

それから提案の中にはいくつか総合学科高校のデメリットを挙げていただいているようですが、そのデメリット1つ1つを検証する中で、現場で、教育委員会で、また設置される市町村で、それぞれの努力によってこのデメリットの部分をもリットに変える、またデメリットをなくすということは、1つ1つ検証はすすんでいるんですか。

(中野市の高校教育を考える会：真島)

その検証がすんでいれば、高校 60 年近い歴史の中でもっと全国に総合学科高校が普及していると思うんですよ。愛知県なんか、4 つしかないんですからね。長野県は一生懸命、お金を人を集めて、塩尻志学館高校をつくりましたけれども、地元の塩尻出身の子どもが塩尻志学館高校へ入るのが少なくなっている状況は心配ですね。

(青木委員)

逆に、そうはおっしゃっても全国 240 いくつですか、総合学科高校は既に誕生し、現在もしつつあるわけですが、デメリットだけでなく、メリットの部分は何があるかないかは検証なさったことはありますか。

(中野市の高校教育を考える会：真島)

メリットの部分は、今まで不十分だった総合的な学習の時間、総合学習が可能になるということです。総合学習は、普通国民的教養を保证する普通教科のほかに、あまりに多過ぎてはいけません。1 つの学校です。

阿智高校や中野西高校なんかは、非常にいい総合学習ができています。そういうような総合学習を、どんどん増やしていくことが必要だと思うんです。しかし普通科の中に、あまりに多くの総合学科を取り入れると生徒が大変です。1 週間の時間割の中にいっぱい総合的な学習授業がある。ノートを 20 冊近く持っていなきゃならないことになったら、それは困ったことだと思うんです。

(中村委員長)

時間ですが、特にございませんか。

ありがとうございました。

それでは 7 番目のご発表へ移りたいと思います。「中条高校の廃校案に反対し提言します」というタイトルで、校友会会長久保田元夫さま、それから懇話会会長宮島和彦さま、お願いします。

(中条高校を育てる懇話会会長：宮島)

中条高校を育てる懇話会の会長の宮島であります。校友会会長はみえておりません。その代わりに、副会長の鎌倉さんが一緒にございます。なお、私は地元の中条村長もやり、また鎌倉さんは小川村の村長をやっています。それでは、提案を申し上げます。

中条高校を犀峡高校と統合し、犀峡高校の校舎校地を利用するという教育委員会の発表でございます。大変衝撃を受けると同時に、憤りを感じたところでございます。

私どもは、そうでなくて、中条高校をぜひとも存続いただくように提言をいたすものがあります。

育てる懇話会ではありますが、平成元年に中条村、小川村、旧鬼無里村、そして長野市の七二会、この 4 村地区が一緒になってスタートさせたものであります。当時から中条高校の生徒が減っております。そんな関係で、長野から大変大勢の方がみえたわけでありまして。

そんな中で中条高校を魅力ある学校にしようということで 17 年になる活動であります

し、10年前からは財政的な援助もしてきているところであります。中条高校、創立以来97年ではありますが、卒業生が1万2,000人という大変伝統と歴史のある学校でございます。

1番でございますが、中条高校から発信するコモンズ高校教育の先駆けということであります。こうした懇話会の取り組みで、コース制を設けましてようやく効果が出てきたところでございます。

2番目の犀峡高校への通学が困難であるということでもあります。中条高校は、さっき申し上げた、今は中条を中心とした生徒であります。地理的にまた交通の便、それから通学時間、経費等含めると今でさえ、長野へ向かう車が多い中では、犀峡高校へ通うということはほとんど不可能だと思っております。

逆に長野市内へ通学の関係であります。現在も長野へ大勢行っておりますが、バス路線から遠い地区は、そこへ出るまでに大変時間がかかるわけであります。従いまして地元の高校がなくなることになりますと、これは大変なことでございます。

4番目でございますが、中条高校の通学範囲が広いということでもあります。先ほども申し上げたとおり、長野市からかなりの生徒が来ております。そんなことで私も、長野市の中学を回ったり、また地元の中学へお願いしたりして、来春の生徒募集に全力を挙げております。

中条高校が統合されるという発表がされまして、大変不利な状況ではありますが、取りあえず全力を尽くしてやろうということで、あらゆる取り組みをしているところでございます。

それから地域の住民であります。長野市へ転出をし、あるいは家を建てるということも出るわけであります。従いまして、こんな関係では、長野市だけしか通えないということになりますと、過疎がますます進むというような状況にあるわけでございます。

6番のコース制であります。先ほど申し上げましたように4コース制であります。進学コース、情報コース、福祉コース、これはホームヘルパーの2級も取れるように、現在はなっております。それから陶芸コースと、4つあるわけございまして、これらの効果がようやく出てきたというところでございます。

それから進学の関係でも、少数の中で先生方の熱心な指導の下に、希望の大学への進学が進んでおります。9番が重要であります。どうしても廃校というような形になるならば、ジョイント高校として、また長野市内の分校としてでもいいと思います。

そんなことで、この関係をぜひとも検討をいただき、良い報告を頂けるようにお願いしたいと思います。

あと11番でございます。いずれにしてもそんなにあわてないで、地域や地元の関係、あるいはまた生徒が理解できるように、時間を掛けて進めていただきたいと思います。

以上終わります。

(中村委員長)

ありがとうございました。

ご質問等ありましたら、お願いします。

(森野副委員長)

よろしくおねがいします。

高校がなくなると、村の拠りどころというものがなくなるわけではありますが、これは切実な問題だと思います。

今、新聞紙上で出ています村自身の長野市への合併問題と、この中条高校との兼ね合いですね。それで村とすれば、長野市内から通うお子さんに交通補助というようなこともお考えになって大変財政的にも厳しいかと思うんですが、その点ひとつお願いしたい。

それからもうひとつここで、ジョイント校の検討と、あるいは分校でもいいよというような、もう最終段階、死活問題ですね、これね。ここまで来ているかと思うんですが、このとき犀峡の良さと、中条高校の良さ、メリットというものを生かしていけるようなジョイント校ということになるかと思うんですが、この決意のほどをお聞かせ願いたいのですが。

(中条高校を育てる懇話会会長：宮島)

通学費の関係であります、中条村から長野へ通う子には補助しておりません。犀峡高校は数年前から長野市から通う生徒に通学費補助をしております。従って距離も時間もかかる犀峡ですが、中条へ長野から通うよりも、時間はかかりますけど安い（補助を入れると）という状況になっています。

そんなことで、今年の生徒は逆転しております。それだけに、犀峡のほうが早くから危機感を持って取り組んだということもあります。中条高校についても、今年からその補助をし、また団体の定期バスということで、運賃が2割ほど安いこともやっております、いずれにしても地元だけでは生徒が少ないですから、長野市から確保するということになります。

それから先ほど犀峡のことも申し上げましたけれども、地理的に、あるいはまた皆さんもほんとは調査をお願いしたいと思うんですが、現実的に見ると中条のほうがいろいろ統合するには、そのほうがふさわしいと思うんです。

従ってどんな内容があって犀峡になったかわかりませんが、その辺までよく考えてお願いしたいと思います。

(森野副委員長)

合併の問題はいかがですか。

(中条高校を育てる懇話会会長：宮島)

合併は、今23の村内の区域で説明会をしております。中条村は住民投票で長野と決まっております。ただ進め方に足並みがそろわない。早くやれ、早くやれという人たちもおりまして、これを理解してもらうように進めておりますが、いずれ長野市ということになります。

ただ通学補助については、市ではそれをやっていないはずですから、これについては合併すれば補助はないだろうということですね。

(森野副委員長)

犀峡高校よりも中条高校のほうが、長野市からの生徒が受けやすいという判断ですか。

(中条高校を育てる懇話会会長：宮島)

ええ。それははっきり通学費が、先ほど申したように犀峡へ行ったケースがありますので、距離とか時間とか、今度は通学費も犀峡よりも安くなりますから、そうなるとうた見方が全然違ってくると思います。

(森野副委員長)

じゃあ、分校でもよろしいと。

(中条高校を育てる懇話会会長：宮島)

はい。

(森野副委員長)

ありがとうございました。

(丸山委員)

私は中条にいたことがありますから大体わかるんですが、私も推進委員会でも言っているんですが、中条がなくなった場合、犀峡が無理だというのはよくわかります。犀峡はほとんど行かないでしょう。グルッと回らなければいけない。

問題は、長野へ行けると言う人がいるんですが、私は長野へ行けるとしても、普通にとうか気楽に1本で行けるのは長野工業くらいだと思うのです。

そういうところも、きちんと訴えておくべきじゃないかなと私は思います。その辺の状況をちょっと説明してください。

(中条高校校友会副会長：鎌倉)

鎌倉です。発言させていただきますが、私どもの村は当面自立ということが大勢を占めていまして、先のことはわかりませんが、そういった中で取り組んでおります。

単純に、長野へ行くのは簡単だと言われますが、これは私どものほうは奥のほうから父兄が朝送ってきて、そしてバスに乗って長野へ来る。あるいは父兄の車に乗って、一緒に長野へ行くということをしないと行かれないわけでした、そうしますと朝7時前に出ますので、それに乗って長野へ行くということになります。

そういうことになると、地域の中の学校がないということについての切実さというもの、平等とうような形からいくと非常に難しいと思っておりますし、また西山の地域、長野から見て西のほうのということですが、全般の中の地盤沈下と申しますか、そういうものを起こす、一番最大の要素になっている、こんなふうを考えておりますので、地域の子弟を育てるということ、そういった地域で住みたいという住民の気持ちもじゅうぶん考えていただきたいと思っておりますので、ぜひ高校は残していただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

(中村委員長)

時間が来ておりますが、特にございますでしょうか。よろしいでしょうか。

どうもありがとうございました。

3区の途中ですが、休憩を取らせていただきたいと思います。

【休憩後再開】

(中村委員長)

それでは時間がまいりましたので、再開させていただきます。

次は8番目のご発表で、「地域振興の担い手を育成する地域校づくりの提案」というタイトルで、野口清人さま、お願いいたします。

(信州の教育と自治研究所：野口)

時間がありませんので、お手元にあります資料の、その主として2点について申し述べたいと思います。

1点は24ページ目に7としてあります、地域興しと学校づくりは一体の課題であるという点についてと、もう1点はメモ25ページの第2部というところにあります、地域高校としての教育づくり、その中身は何かという点に絞って申し上げたいというふうに思います。

まず第1点の問題ですが、私ども今度の高校統廃合というような問題で地域高校、それからその周辺の地域というのは、もし廃校等になればどうなるのだろうということで、この枠の中の中条高校、犀峽高校、それから地元の町村を対象に調査をしました。

両校とも先ほどの説明がありましたが、明治、大正の時代に学校創設はさかのぼります。当時は小学校教育で、子どもたちの教育は頭打ちだったものが、何とか中等教育ができないかということで、数カ村で努力をして学校組合をつくって設立したものであります。

その教育の狙いというのは、山村の産業、農業、林業、それから当時盛んになりだした養蚕ですね。その振興の担い手、あるいは女性の場合には家庭教育ではないかというようなことを担える人を育成したいということでなされたようです。

今日まで、これらの学校を出た方々が、地域のさまざまな分野を担ってきて、今日に至っているという状況であります。当時と今日(こんにち)は、特に山村の場合少子高齢化というものがかなり進んでおりますので、そういう状況に違いはありますが、地域興しという問題は非常に切実であり、大変重要な課題になっていると、そういう点で学校創設当時の、この地域を振興しようという状況と同じであると思います。

高校がどれほど小規模であろうとも、やっぱりその地域興しをしていく場合に、地域高校は絶対不可欠な存在であるというのが、私どもがこれを対象にした教育研究で得た結論であります。

2点目は、どういう地域高校として教育の中身をつくったらいいかという、教育づくりの問題であります。やはり地域で学ぶ子どもたちが、地域にいろいろな課題があればそこに入って、そしてそれを担って、地域を暮らしやすい里にしていくということは、なかなかロマンのある仕事ではないかと思います。

やはり地域にある高校というのは、それをやっぱり目指すべきではないかというふうに

思います。それには、やはり職業意識とか職業能力、そういうものを培う必要があります。ヨーロッパの諸国などで、高等学校教育の職業教育と比べれば歴然としておりますが、日本の高校はその点は中途半端だと思います。

その点で昨年の検討委員会が出した報告書が、キャリア教育ということを提起していますし、その具体的な中身としてデュアルシステムを提唱していますね。残念ながら、どういう内容で、どういう方法でやるのかというところが、ちょっと見えてないのが残念であります。その点が3ページ以下のところに書いてありますが、やはり学校で基礎教育、中身は1、2、3と書いてあります。

それから実際の職業の現場で実務教育を、これはインターンシップという形で、なるべく長期でやるという、この2本立てのデュアル教育を、ぜひ推進させて、そこに地域という物を結び付けた教育を、ぜひしていただきたい。

これはやはり特色ある高校づくりのすぐれたものだと思いますし、問題になっています。志願者も必ず増加するということを確認します。

以上です。

(中村委員長)

ありがとうございました。ご質問等ありましたら、委員の皆さん、お願いします。

(丸山委員)

この調査と提言について、私は非常に関心を持っていますが、特に今の話もそうですが、今ちょっと飛ばしちゃったんですが、24ページの5番の、この委員会でも、県教委も言っていることなんだけど、小規模校によって教育力が低下するという問題が、指摘されて小規模校がいくつも出てきちゃうのは問題であるというようなことがあって、ここに低下しない、低下していないという調査の報告があるので、そこをちょっと説明してください。

(信州の教育と自治研究所：野口)

その問題は、ひとつには生徒が少人数なものですから、教師の手が一人一人の生徒に実によく入りやすい。教師も非常に努力をしているということをお聞きしました。生徒と教師の間に、いわゆる好ましい人間関係が生まれて、生徒にとってもやっぱり自信が出てきたり、あるいは自立意識だとか、あるいは進路意識といいますか、目的意識といいますか、そういうものも育ってきているという面がひとつあると思います。

それからもうひとつは学習活動、それからクラブ活動ですね。それから学校裁量の問題、こういうようなものは少人数だとなかなか困難が付きまとうということは、当然あるわけですが、こここのところは地域との協力、協働というような、細かいことを言いますときりがないのですが、それからもうひとつ注目したいのは、他の高校との連携、これも協働でクラブ活動なども成り立たせているというのですが、こういうのを見ますと、高校教育のむしろ今後のあり方について、何か方向性、あるいは可能性というものを感じさせられました。

そういう点で、今おっしゃったような小規模校というのは、やはり活力が乏しいんじゃない

ないかと一般には思われているようですが、実際にこの2校を訪れて、あるいは地域の方の声を聞いたりしますと、必ずしもそうではないのかということが、私はあると思います。

(中村委員長)

ほかにございますでしょうか。

(宮本委員)

地域で行う実務教育について、ちょっとお聞きしたいのですが、具体的に中条、犀峡を訪れたということで、一般的なことを書かれているようですが、中条、犀峡でもし地域で行う実務教育となると、目玉となるようなものとしては、どういうことをお考えでしょうか。

(信州の教育と自治研究所：野口)

必ずしも産業面では、なかなか通常考えると困難なところがありますね。つまり事業所がそんなに多くないということでもあります。ただ、例えば村には役場があるとか、それから当然医療機関がありますね。それから、老人施設のようなものがあります。

生徒たちの中にも、例えば資格を取って将来ヘルパーになりたいとか、そういう具体的な要求も地域に即して出てきたりしています。そういうところでは、もちろんできますね。

それから私は、きちんとした事業体をなしているところでなければ、つまり従業員が10名とか30名とかいて、社長さんがいて、そういうシステムのところはもちろん対象になりますけれども、例えば今、老人夫婦が細々と自分の田畑をやっている。それも対象になると思うですね。そこに入って、例えば一月なら一月一緒に仕事をしてみて、そこで物を育てる技術を覚えるとともに、そういう農業のあり方の現実をじゅうぶん学習価値があるというふうに思います。

そこから、学習者は自分に課題という部分を見いだしていくことも可能ですし、むしろここでいう実務教育なり、学校でやる学習ですね。その中で、そういう芽生えが出てくることを期待したいカリキュラムだと思います。

(中村委員長)

若干時間があります。特になければ。よろしいでしょうか。

ありがとうございました。

続きまして、第4区、9番目に移ります。

「長野南高校存続について」「県立高校再編整備候補案(非県教委案)」ご発表は同窓会長の西澤さんです。お願いします。

(長野南高校同窓会長：西澤)

長野南高校同窓会長の西澤章です。初めにわれわれの主張は、単なる愛校心やノスタルジーからではありません。客観的に見て、「県教委案はおかしい」という信念が、今までわれわれを突き動かしてきたんだと思います。

この発表や提出資料をじゅうぶんご理解いただき、今後の議論にしっかりと反映される

ことを強く要望するものであります。今回、私が発表するポイントは2つ。

1つは、高校の適正配置、2つ目が流入入です。1つ目の高校の適正配置について。長野南高校の地元、更北、川中島には5万7,000人を超える人口があります。5万7,000人です。しかも北信地域で唯一、人口増加を続けている特異な地域でもあります。

5万7,000人を擁する地域に、1つも高校のない地区は、長野県内広しと言えども、どこにあるのでしょうか。片や、隣の須坂市は半径600メートルに、4つの高校が存在します。たったの半径600メートルの中にです。長野南高校に一番近い高校は篠ノ井高校ですが、3.6キロです。松代高校までは、5.6キロもあるんです。

5万7,000人を擁する、この広大な川中島平に高校が1つもなくなり、片やたったの半径600メートルの中に4つの高校がひしめき合っている須坂市は手付かず。これを適正配置と言うのでしょうか。

須坂市は、更北、川中島より少ない5万3,800人。15歳人口も、大幅な減少になることも付け加えておきます。2つ目、流入入についてですが、地元の高校が定員を満たし、その上で生徒が流出するということは、その地域に高校が少ないことを如実に示しています。ですから流出の多い、更北川中島には受け皿となる高校が、少なくとも1つは必要なんです。県教委は、この理屈を逆手にとって、流出が多い地域に高校は必要なし、これを本末転倒と言わずして何と言うんでしょう。

では、流入の多いところはどこでしょう。これも、須坂地区です。ほかからの流入によって、定員を満たしています。以上のことを踏まえて、議論を進めていただきたいと思います。

さてもうひとつ、提出資料、「県立高校再編整備案（非県教委案）」についてですが、本来名前の挙がった高校が代替案を出す義務はない。このとおりです。しかしあえて、代替案を提出するにあたり、勇気を出し、火中の栗を拾う覚悟でここの提出いたしましたこと、ご理解いただきたいと思います。

ぜひ推進委員の皆さま方には、ずくと勇気を持って、おのあの私案を持ち寄っていただき、県教委の押し付け案ではなく、独自案を提出していただきますよう切に願うものであります。

さて、最後にもう一度主張しておきます。1つ、更北、川中島地区は人口が5万7,000人以上、しかも増加し続けている唯一の地区である。2つ、15歳人口が多い地区故、流出があること。3つ、流出が多いから高校が必要ないという理論は、絶対に間違いであること。この3つを踏まえて、長野南高校の位置付けを考えていただきたいと思います。

これにて、長野県長野南高等学校の存続を願う会の発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

（中村委員長）

委員の皆さま、ご質問等ありましたらお願いいたします。

（宮本委員）

皆さんが言う、「非教育委員会案」のところに、第４区の屋代南高等学校の「多部制・単位制の高校への転換」とありますが、そちらの存続のこととどう関係するか、もう一度説明をお願いします。

（長野南高校同窓会：西澤）

存続とは、われわれのことでいいんですか。

（宮本委員）

はい。

（長野南高校同窓会：西澤）

これは、われわれの４区と３区を考えた場合にバランス的にどうかということで考えたものでございます。このことにつきましては、中沢委員さんからもご提案があったとおりでございますが、確かに屋代南というと、非常に交通の便がいいということで、こちらのほうで出させていただきました。

（宮本委員）

意味がちょっとわからないのですが、存続とは直接関係ないと理解してよろしいですか。

（屋代南高校同窓会：西澤）

そうでございます、はい。

（宮本委員）

県教委案に反対するという立場というか、そういう代替案として出されているということですか。

（長野南高校同窓会：西澤）

そうですね。存続とは、また別のものではございます。

（中村委員長）

ほかにございますでしょうか。

（丸山委員）

主張の趣旨はよくわかりました。存続を願う会となっておりますが、ちょっとお聞きしたいのはこの中身はについてでございます。

ただ、何と言いますか、長野南をつくった歴史的な経緯がありますよね。だから私も、この推進委員会で主張しているんですが、長野南がなかった時代に戻すという話だということだったと発言したのですが。

もう少し、願う会と地域の関係、地域の方々を、やっぱり先ほど主張されたように、な

なかなか行く高校がなくてあふれて、長野北部のほうに行くんだと。私は率直に言いますけど、そこには学校格差があるんだろうと思いますが、その辺の地域の声といいますか、様子といいますか、その辺と、それから願う会が地域の持つ大きなというか、運動というか、動きなどそういうことの見通しなど、現状を教えてください。

（長野南高校同窓会：西澤）

この発表の中で言おうかどうか迷ったことですが、はっきり言ってこれで23年経過しましたが、長野南高校は地域高校と言われながら、固く貝のように閉ざしてきたような学校だと、私は思っております。非常に地域になじんでいなかった学校だと思えます。

ほんとにそういう意味では残念で、そういうことも流出のひとつの原因にはなるんじゃないかなということも、この場で言わせていただきたいと思います。

しかし、今回このような機会というか、これが善きにつけあしきにつけ、今回地域の皆さん、大変多くの皆さんに集まっていたいたおかげで、今後存続が決まれば大変地域の皆さんから、いろいろなお力添えをいただいたり、ご意見をいただいたりして、非常に地域に根差した高校ができるなというビジョンが、われわれにもわいてきております。

そういう意味では、今回のことがきっかけで、いい高校になっていけるという自信が、われわれ5万7,000人の人口から始まりまして、増加傾向にあると、こういうことを含めまして、大変いい高校になっていくんじゃないかと、そういうことは確信を持って言えると思います。

（小山（元）委員）

中学、それから小学校関係ですかね。これから子どもたちを送っていく、その地域、住民の方々のご意見をお聞きしたわけですが、中学の生徒諸君の声というのは、もしお持ちでしたらお聞きしたいというふうに思います。

直接、中学の保護者の皆さん方がどういうお考えでいらっしゃるか。同窓会のお立場でお話されたと思いますけれど、川中島、更北地区の、そういう関係をお持ちだったら教えていただけますか。お願いします。

（長野南高校同窓会：西澤）

先ほどの話と似たようなところもあります。今日、中学校のPTA会長の皆さん、おそろいでございますが、確かに先ほど言ったとおり、地域から閉ざされた学校であったことがあります。経緯があります。

ですから、「あの学校は行かなくてもいいよ」という父兄もいらっしゃいますが、しかしあの場所に、あの人口がありまして、あれだけの1つの学校がなくなっていることは、非常に衝撃的なことでございますので、絶対に残していただきたいという願いにおいては、中学校の皆さんの声も同じでございます。

私どもの、存続を願う会も、皆さんに役員として入っていただいておりますが、その意見は皆さん統一しております。

(小山 (元) 委員)

ありがとうございました。

(中村委員長)

ほぼ時間ですが、ほかにございますでしょうか。

(坂口委員)

ちょっと、よろしいですか。

今、「地域に閉ざされた」という表現で、ちょっと具体的にイメージがわからないのですが、これからいい高校になっていく、いい高校とか、閉ざされたというその辺りを、もう少し具体的に伺えますか。

(長野南高校同窓会：西澤)

非常に難しいことがあります。やはり地域に対して、例えば奉仕活動であるとか、ボランティア活動であるとか、そういうことに対して、この学校ができたのは地域の皆さんの厚い切望、それからやっぱり地域のこの学校がどうしても必要だということで、出来上がった割には、教員の皆さんにこんなことを言って失礼なんです。ちょっとその辺のご努力が足りなかったという意味では、ちょっと表に出てこなかったところがあるかなということ、私が 23 年間見ていて感じるところです。

(中村委員長)

ほかに、特にございますでしょうか。よろしいでしょうか。

はい、どうもありがとうございました。

では、10 番目のご発表で、「進学型中高一貫校の設置に向けて提案、長野南高校を進学型中高一貫校として創生する」というタイトルで、蟻川幸彦さま、お願いします。

(中高一貫教育実現を求める親の会：蟻川)

中高一貫高校実現を求める親の会、蟻川です。私どもは、犀南地区、長野市の南部の地区、西澤同窓会長がおっしゃった更北、川中島地域の主に新旧 P T A 会長役員等によって構成されています。

提案ですが、長野南高校を進学型中高一貫高校として創生する。理由、地域に親が行かせたい学校を設立することで、地域にも、生徒にも大変有意義であることは明らかで、進学型の中高一貫校は親の真のニーズに最も近いと思います。

残念ながら公立の中高一貫校は、長野県下に 1 校もなく、計画ありません。全国的な広がりを出す動静を一切無視することは、長野県にとって望ましくなく、少なくともモデル的に導入し、その必要性を検討すべきです。その点、設備が整い、廃校の危機にさらされている長野南高校は、費用面でも、地域の理解の得やすさの点でも、そして周囲に抱える人口からいっても、モデル校として中高一貫校に転換するのに最も適しているものと思われま。

なお、中高一貫校の設置には、地域に競争原理を導入することで、地域の中学校の活性

を促すという効果もあると考えます。

一方地域評議員制は、教員の人事に左右されず、一貫した教育方針を確立できる点で優れています。公立の中高一貫校の場合、本制度は不可欠です。設置と同時に、本制度を立ち上げるべきと考えます。

以下、説明に移らせていただきます。資料の 51 ページをごらんください。すでに私以外でも 2 力所から、中高一貫校についてはご提案がございましたが、資料 1 にありますとおり、文部科学省のホームページによりますと、公立の中高一貫校は 16 年度で 42 都道府県、120 校あり、17 年度はさらに 13 校増え、18 年度には 38 校の開校が予定されています。

残念ながら長野県での設置はいまだなく、計画すらありません。未計画なのは長野と富山と鳥取ということになっています。中高一貫教育には、中学校、高校の 6 年間を通して、計画的、継続的な教育を行うことで、よりきめ細かな教育が可能等、さまざまな利点があるとされています。

一方、次のような欠点が言われています。受験エリート校になる可能性。実際、東大の学生の出身校が、私立および国立の中高一貫校で、全体の 62.1 パーセントを占め、その比率は年々増大しています。

一方公立高校出身者は、昭和 63 年には 47.6 パーセントあったものが、14.3 パーセントに減少しています。また次に、地域の中学校が崩される。受験競争の低年齢化という点も懸念されています。利点については説明する必要もありませんので、欠点として挙げられている点について述べていきます。

まず、受験エリート校化を問題視する点ですが、本当にこれは問題なのでしょうか。身近にこのような高校があり、自分の子どもを通わせることができたと思う親は多いのではないかと。資料 2 をごらんください。

長野県長野市、全人口の 15 パーセント。中学校の数ですと、17 パーセントの学生を抱える犀南地区の中学校から、長野高校へ進学する生徒は 10 パーセントを切っております。ちなみに犀南地区からは、進学できません信州大学教育学部附属中学の場合、6.4 パーセントの生徒割合に対して、長野高校への進学率は 22.3 パーセントという、非常に大きな数字になります。

もうひとつ、次に地域中学の崩壊につながるのではないかとという危惧です。実は、これこそが進学型中高一貫校をつくることの利点だと、私は考えます。身近な例で言いますと、附属中学の周りの公立中学は崩壊しているのかということです。私の知り合いの先生にお聞きしますと、むしろ旧市内よりも新しく長野市に加わった中学に荒れた中学が多いと言われています。

このように中高一貫校をつくることは、地域の中学によい刺激を与えることになります。また教員の資質も問われることになるから、より熱意のある教育が生徒たちに注がれるものと確信しています。

最後の受験競争の低年齢化ですが、現在の親の志向はさまざまで、必ずしも全員が子どもの教育、特に進学教育に熱心だとは思いません。要は中高一貫校を必要としている親と子における選択肢がほしいんです。

すでに私立がありますが、長野日大は中高一貫教育を実施しています。その成果に注目していますが、残念ながら高校生ならいざ知らず、中学生にはあまりにも犀南地区から遠

いというのが実感です。ただし無理をして通っている生徒も、すでにおります。

公立高校で、中高一貫校を成功させるためには、いくつかの条件が必要です。まず優秀な校長による、強いリーダーシップが必要です。民間からの採用が必要かもしれません。次に地域評議員制度ですが、地域と評議員が貴重なこの学校を、先生とともに責任を持って育てていくということが必要になります。

最後に、地元大学にさえ県外者が多数を占める現状を認識し、少なくともやる気のある生徒たちに、よりよい環境を与えることが、長野に住む親の責務であると思います。いたずらに一般の教育課程になじまない生徒のためだけに改革するのではなく、将来日本を背負う人材や、地域の核となる人材を育成するために教育があるということを忘れないでほしいと思うのであります。

以上です。

(中村委員長)

ありがとうございました。

ご質問ありましたら、推進委員の皆さん、お願いいたします。

(小山(元)委員)

中高一貫教育のことをお聞きしたいのですが、考えておられる規模数というのは、どのくらいの定数で描いておられますか。

(中高一貫教育実現を求める親の会：蟻川)

今のところ、中学校がやはり通うのが大変ということがございますので、今のところは犀南地区から広徳、更北、川中島中学がありますが、そこから取りあえずは1クラス分ずつ、3学級くらいを目標に中学を編成していくというのが、まずモデル校としてはいいんじゃないかなと考えております。

ただこれにつきましては、詳細についてはより専門の方々によって、議論をしていく必要があると思います。私だけは、一応今のところはそんな考えであります。

(中村委員長)

ほかにございますでしょうか。

私からよろしいですか。再編整備の関連でお尋ねしたいんですが、これは長野南高校の充実ということになるのでしょうか。ほかに、例えば再編するとか、そういうセットのご提案になるのでしょうか。

(中高一貫教育実現を求める親の会：蟻川)

長野南高校について、先ほどの西澤会長さんのお気持ちはよくわかりますし、だいたいもう私どももよく聞くところでは、初めにすばらしい校長さんが来て、みんなやる気になって地域の中学もいい生徒を送り込んでやろうと言ったんですが、初めはいざ知らずですが、だんだん校長が替わり、だんだん風紀も乱れ、そして地域から見放されというような形になっていく、そういうような状況でありますので、何とか長野南高校が、さっきの

西澤さんのお考えのように改革できるならば、私はそれがひとつの手だと思っています。

ただそれに対して、伝統的な高校重視の今の教育の人事制度では、やはり新規の高校には非常に不利だということで、中学から新しい形のモデル校として再生していくというのが、一番ベストかなと思っています。

ただこれについても、一応案については、この最後ページ書いておきましたが、これも来年度は基本的に「長野南」の入学がありますので、それについてはこの廃校という過激な表現はしましたけれども、名前だけ替わっていくというような形でも、実質的な実が残れば、私はそれでいいと思っています。

（中村委員長）

中学生の立場、その保護者の立場ということでお尋ねしたいですが、先ほどの西澤さんのご提案、それから以前いただいた要望書を、現小中学校の会長さん方がそちらにいらっしゃると思うんですが、お名前が挙がっています。

蟻川さんの親の会のほうは、副会長さん方と過年度の会長さん方のお名前ですが、まるっきり重複がないんですが、この辺は地域を挙げてということではなくて、分かれてご提案ということでしょうか。

（中高一貫教育実現を求める親の会：蟻川）

基本的に、長野南高校を存続する会がありまして、それで非常に活発な活動していて、その中に地域の小中学校の会長さん方、皆さんが加わられたと。すでに、そういう状況がありましたので、やはり完全に一致する意見ではありませんので、そういう面で、また新たに賛同いただく、重複しない形での賛同を求めたというのが、この組織編成になっております。

（丸山委員）

ちょっと率直に申し上げますが、誤解しないでもらいたいんですが、議論をするためにということで。進学型の中高一貫校は、親の真のニーズに最も近いところや、50ページのところにも、「服装の乱れ、夜遅くまで地べたに座り込んでたむろする生徒もいる高校を、地域の親がほんとに欲しているでしょうか」というところなんか見るにつけ、エリートに進学校をつくるんだなという感じがするんですね。

それはそこに実際問題として学校格差があり、地べたに座る生徒もいるわけなんです。うちの学校なんかそうなんです。そういう子が来る学校もいるわけですね。そういうことになったら、南高をバリバリの進学校にしていくと、そういうのを犀南地区につくるだんということを考えていらっしゃるというふうに思うんですが、その場合には正直学校格差の中で、そこに行けない、あるいはそういうところに入れない子たちはどこかに行くわけで、そういう生徒たちを預かってやる学校が、また出てくるという現状が、今の高校の中に現実問題としてあるわけです。

いい子を取りたいとか、できる子を取りたいとか言いますよ。いい子を取れば、どこかがそこへ行けない子どもを取ることになるわけです、現実問題として。90何パーセントの入学ですからね。そういう点については、どういうふうにお考えでしょうかね。

(中高一貫教育実現を求める親の会：蟻川)

初めの質問、真のニーズ。これは図らずも県の教育委員会や議会で答弁がありましたとおりです。もう、私はそれ以上は言いません。

あと地域において、エリート校にするのか、ということですが、私はエリート校になればいいと思うんです。それが、やはり必要だと思っています。

それに漏れた生徒をどうするかというのは、また違う次元の話です。これは長野南の、あの地域における私どもの求めている次元の話と、それとおっしゃられている、じゃあそれであふれた生徒はどうするかという問題は、まったく違う次元の話で、違うところで話さなければいけない話ではないかなと私は思います。

(中村委員長)

時間ですが、よろしいでしょうか。

ありがとうございました。

それでは11番目のご発表で、屋代南高校についての現状と提案について、ご発言は中澤満子さんです。お願いします。

(屋代南高校の将来を考える会：中澤)

屋代南高校の将来を考える会でございます。よろしくお願いします。

私どもは、第7回の推進委員会において、多部制・単位制高校の候補に屋代南が挙がったという報道に、驚きを禁じ得ませんでした。以後傍聴を重ね、同窓生の思いを訴えたいと願っておりましたところ、機会が与えられましたことを感謝いたします。

千曲市には、大学進学率の高い高校と職業高校としての色彩が強く、専門学校への進学率が高い、それぞれ特徴がある2校が存在しておりますが、今後ますます多様化する社会のニーズに対応するためにも、特徴を生かした2校が存続することが理想的だと思います。

それでは55ページより、屋代南高校の現状と今後の高校のあり方について、提案させていただきます。1、屋代南高校の現状を申し上げます。1、設置学科は普通科とライフデザイン科があります。

2、普通科の教育課程の特徴。幅広い生徒の進路希望に応えるため、大幅な選択制を導入、少人数授業を実施、商業科目が充実、資格取得検定を積極的に受験しています。ライフデザイン科の科目も、履修可能。

3、ライフデザイン科の職業科としての伝統と実績。平成20年度、創立100周年を迎える当校は、創設以来職業科高校としての歴史と実績を持ち、被服科は昭和23年に設置され、今年度ライフデザイン科に改変されました。これは介護用二部式寝間着です。(委員へ提示)昭和59年から、改良を重ねながら千曲市、坂城町の高齢者に寄贈し続けています。またバザーの収益金を、全額市へ寄付しております。

4、地域とのつながり。生徒の進路状況は、地域に就職するものが多い。この『千曲染め』(委員へ提示)は、地域企業や行政と結び、千曲市のブランドとして育てるよう、検討を始めました。

2、提案。屋代南高校を普通科を併用する、県内有数の家庭科の職業科高校として、専門性をさらに高め、地域に貢献する職業科高校のモデル等にする。家庭科は将来、県下で各

通学区に1校の程度で設置されることが予想される。そのため、職業科高校として高い専門性と社会への還元が求められる。

全日制普通科を併用する職業科高校なので、相互に科目の履修ができる。その利点を生かし、生徒にとって魅力ある教育課程が設定できる。地元就職する生徒が多く、長い歴史があり、地域に根付いた高校である。今後も地域とともに、学校づくりをする。

具体策。1、学校運営協議会設置。2、専門学校や大学との連携。3、産業現場での研修と就業体験。4、地域公開講座の開設、公開授業の実施。5、福祉用医療や、生活用品の開発、研究です。

(屋代南高校の将来を考える会：鈴木)

ただいまの提案内容に、補足をさせていただきます。委員の皆さま、お手元に長野県高等学校改革プラン検討委員会最終報告をお持ちでいらっしゃると思いますが、この中の19ページ、20ページに「専門高校の整備とキャリア教育の充実に向けて」という報告がございます。

専門高校の整備につきましては、より専門学科が体系制のある、基礎的・基本的な職業教育を提供するのが特徴と掲げまして、さらに充実をという旨が書かれていると思いますが、もうひとつ注目すべきところは、普通高校のキャリア教育という項目でございます。

ここには普通科においても、キャリア教育を充実させるため、普通高校での職業教育を充実させ、普通高校と専門高校との連携を積極的に促進、互いに単位を互換し、ネットワークを図ることが求められています。

私どもの提案では、こういった同じ職業科高校でも、普通科を併設するところは、現在家庭科という学科を見た場合、屋代南高校、丸子実業高校、臼田高校、飯田風越高校の4校のみです。

しかも家庭科という学科を考えた場合、この範囲は非常に広い範囲でございまして、今後注目されるべき学問分野であると私たちは考えているのですが、保育、家庭、男女共同参画など、人生において学ぶべきところが多い、非常に可能性の高い学科と考えております。

そこで私たちは、このような学科の特色をとらえまして、ぜひ重点的にここの屋代南高校のライフデザイン科を、普通科を併設するという特徴をさらに生かし、モデル校となるように、この再編整備候補案、県教委のほうでは実業高校については述べられておりませんが、ぜひ新たなご提案としてここにご提案申し上げたく存じます。

よろしくお願いいたします。

(中村委員長)

ご質問等ありましたら、よろしくお願いいたします。

(宮本委員)

県の候補案には載っていなかった屋代南高校ですが、その後出たところで驚いたという話がありましたけれども、地域の皆さんや、今回は同窓会ということで出てきましたけれども、PTAだとかそんなところの皆さんの考え方はどうでしょうか。

(屋代南高校の将来を考える会：中澤)

今回を契機に、どのような学校をつくっていくかを、学校をめぐる地域の全体の中で検討を深めていきたいと思っております。それで7日に、先ほど申しました屋代南高校の将来を考える会というのを発足させまして、できるだけ広範囲な人々にご参加願って、PTAや在校生、地元地域、小中のPTAの方々を含めて、地域の学校として将来像をまとめていきたいと思っております。

まだ7日に発足したところでございまして、ちゃんとした組織もできておりませんが、始めてまいりたいと思っているところでございます。

よろしいでしょうか。

(中村委員長)

将来的にも、地域の皆さんを挙げて、高校の改善、改革に努めていきたいと、そういう組織ですか。

(屋代南高校の将来を考える会：中澤)

何か、名前が挙がったことが良い機会だと思います。だから生徒会でも、それから私も、平成20年で100年を迎えるわけですが、やってきたのを見直したいというふうにも考えております。

(中村委員長)

ほかにご質問等ありましたら。よろしいでしょうか。

はい、どうもありがとうございました。

(屋代南高校の将来を考える会：中澤)

どうもありがとうございました。

(中村委員長)

それでは12番目のご発表で、「長野県高等学校改革プラン第一推進委員会への提案」というタイトルで、高橋満さま、お願いいたします。

(坂城高校を発展させる会：ワダ)

私は、坂城高校を発展させる会の事務局長をさせていただいております、ワダヒデユキと申します。今日は発表のほうを務めさせていただきますので、よろしくお願いしたいと思います。

まず手短かに提案等につきまして、お話しさせていただきたいと思いますが、まず坂城高校について、どういう高校であるかということ、それから若干多部制・単位制についてのご提案といたしますが、そのことについて大きく2点について触れていきたいと思っております。資料をごらんいただきたいと思います。

まず提案としまして、坂城高校は地域に有為な人材育成のために、全日制普通科高校として現在、それから将来ともに存続させていきたいというのが、私どもの一番なる主張で

ございます。

今まで坂城高校は、坂城町にただ唯一１校の全日制普通科高校として存続してまいりまして、地域に人材の輩出等、かなりの貢献を今日までしてきたと自負しております。そして例えば、その中で坂城町との、地元との提携あるいは町づくりのためにどのようなことをしてきたかということですが、坂城高校の２学年になりますと、全員が１日地元の企業に見学をして回るといったことも、坂城町が物づくりの町ということありまして、テクノセンターというのがございますが、こうした施設を中心に福祉施設あるいは町内の企業等が協力していただきまして、その生徒の受け入れをし、そして１日かけて進学する生徒あるいは就職希望の生徒、どんな将来を目指すかは問わず、全員の２学年の生徒について受け入れをし、将来また地元に戻ってきてほしいということを見据えた上で、こうした取り組みを町とともにしております。

このときに町では、バスの費用、そうした補助等毎年予算計上していただいているということもございます。それから長野大学というのが上田市にございますが、坂城高校の生徒を対象にしまして、坂城町の施設におきまして、「坂城講座」というものを開講していただいております。坂城高校の進学希望の生徒が、その講座に通い、将来同校に進む、あるいは大学進学希望する、そういった道を探すために、そういう講座に出向いております。

こうした取り組みをしながら、坂城町が補助をして、将来坂城で生まれた子が坂城中学を出て、坂城高校に進み、そしてできれば地元企業に勤めてもらいたい。進学しても、また坂城に戻って、そこに定着してほしいという、そういうことを想定して町が支援している事業でございます。

工業の盛んな坂城町ということでありまして、地元出身者の多い坂城高校は、地元企業への人材供給源といえますが、そうした高校として、とても期待をされております。こうした中で、教育活動に対して地元企業あるいは地元行政が、毎年支援をしているという体制を取っているわけでありまして。

それから多部制・単位制関係であります。４通全部に１校ずつの多部制・単位制高校の設置をという基本路線の中で、坂城高校がその対象校ということで候補案として出させていただいたわけでございますが、旧４通、いわゆる更埴地区につきましては、この資料にもございますが、私立高校というのが、長野俊英高校１校でございます。募集人員が、ほぼその卒業生の７０パーセント前後を想定している中で、旧４通については長野南高校および坂城高校の全日制を廃止することによって、かなりなそこへ進学しようとする中学生に多大な影響を与えるという、そういう状況がございますので、長野市内等に多部制・単位制の対象校を求めているいただきたいというのが、２つ目の主張でございます。

以上です。

（中村委員長）

委員の皆さま、ご質問等ありましたら、お願いします。

（宮本委員）

多部制・単位制の高校についても、他県に行ってみ学したと聞いていますが、見学してどういう印象を持ちましたか、ちょっとお聞かせください。

(坂城高校を発展させる会：ワダ)

すみません。会全員で行ったという経緯じゃなくて、その中の何人かが行っているわけ
でして、申し訳ございませんが、私は参加しておりませんので、実際的な印象というのは、
実体験をしておりませんのでお答えできませんが、そういう立場でお話しさせていただい
てよろしいですか。

多部制・単位制の学校というシステムからしますと、クラス編成がないとか午前中の部、
午後の部、あるいは夜の部というような形で、時間的に自由な出は入り可能な体制にな
るという、こういった状況を見ますと、今まで町が進めてきた町づくりという面、それか
ら地元に着定してほしいという望み、こういったものからして坂城町とすればどうかと、
いかなものかなという学校のシステムになってしまうのではないかと考えてお
ります。

今回坂城町が、多部制・単位制の学校にどうかというひとつの考えとして、交通の利便
性、通いやすい、駅に近い、こういったものとか、地理的な状況の中でふさわしいのでは
ないかとか、あるいは地元の企業との連携が図れる、そういったことを想定されているよ
うですが、いずれのことにつきましても、まだまだほかにふさわしい学校があるのではな
いかと考えております。

(牧 委員)

提案の のところですが、多部制・単位制高校うんぬんということで、今お話がありま
したように、こういう学校を設定するのであれば、通いやすさの観点から、大都市部の位
置に近い場所というようなことが、設置基準の第1次に挙げられたわけですが、ほ
かの視点からいろいろあると思いますが、想定されるものというのがもしあったら聞かせ
てください。

(坂城高校を発展させる会：ワダ)

例えば、これは飯山線を使って通う方、あるいは小海線を使って通う方というのがある
かもしれません。しかしそういった遠方から見て、ちょうど中間地点にある坂城高校とい
う地理的なことが、はたして言えるかどうか。

場合によっては、そういう想定はほとんど無意味であり、それらの地域からは通う人が
いないかもしれません。私どもが考えている、一番通いやすい駅というのは、やはり長野
駅だと思います。例えばでは、長野駅から通える高校のどこかに持っていくということま
では言えませんが、今大変跡地利用として考えられているもんぜんぶら座、こういったフ
ロアーを改装する中で、クラスとすれば5クラスあるいは10クラス程度できるのではない
かということも思います。

グラウンドや体育館につきましては、他県についての先進校の状況を見れば、他のグラン
ドあるいは体育館を借りて、1日そこでみんなで体育の授業を行うとか、そういった工夫
の中で実施しているわけでありまして、この多部制・単位制の特色からして、そういった
講義をするだけのクラスということを設置するのであれば、そういったところの施設の跡
利用も可能ではないかというふうに思います。

決して地理的な条件だけで、坂城ということでは、それが必ずしもよろしい選択なのか

ということは、ちょっと疑問に思っています。従ってただいまの回答から、お答えとすれば、長野市、長野駅から通える施設とお答えさせていただきたいと思います。

（清水委員）

私自身も、今のご発表の中にありましたように、多部制・単位制については広範囲から多様な生徒も通い得る場所が適切ではないかという考えを持っている一人ですが、率直にお聞きしたいのは、坂城高校を発展させる会といたしまして、全日制普通科高校としての存続というものに、重きをおいておられるのか。多部制・単位制そのものの高校のあり方、それを坂城ではだめで、もう少し先ほど申しましたように都市部でもという、そのことが大事なのかというお考えなのか、どちらが優先されているのでしょうか。

（坂城高校を発展させる会：ワダ）

全日制を存続させるということが、第一義でありまして、そこは譲れないというのがわれわれの会の考え方でございます。そういった多部制・単位制に通う対象の生徒たちが、いかにそういった学校を設置しても、さらにそこへ通えるかどうかというのは、これはまた実施しなければわからないことですが、選択科目では講座、講座の間に時間が飛んでしまったりとか、この講座を取って、この講座を空けて、この講座を取るというような、待ち時間も場合によっては考えられるわけですね。

そうしたときに、いったいどこで時間をつぶすのか。そういうような不規則なカリキュラムの中で、生徒がいかにそこへ通っていくかということを見れば、やはり都市圏でいろいろ時間をつぶす、そういう言い方は非常に適切ではないかもしれませんが、ある程度学校外で時間をつぶす場所が必要ではないか。あるいは通いやすい場所、通うに値する魅力ある地域でなければ、生徒さんが楽しく通えないのではないかとということも考えております。

従ってやはり学校周辺といいますが、その多部制・単位制周辺に、ある程度いろいろな施設があることが望まれるのではないかとこのように思います。従って坂城にはふさわしくないと思っております。

（清水委員）

ちょっとほかの件なんです、坂城町の町長さんですね。この委員会のメンバーでいらっしゃる、非常に地域と坂城高校というもののつながり、これは常に強調されているところではあるのですが、私は須坂なんです、須坂の場合も、確かに高校と地域ということの密着性というものは確かにあるわけなんです。

でも先ほどからの話を聞いておりますと、ちょっと語弊がある意見かもしれませんが、あまりにも坂城に生まれ育った子が、坂城の中学を出て、高校を出て、坂城の企業に勤めると。それを非常に「よし」としているというか、そういう感を受けるわけなんです。

須坂の場合も、当然須坂の中学、高校を出て、須坂に残る者もありますが、実態を見ればやはり、もちろん県外からも就職する者もおりますし、市外からも就職する者もおります。企業に勤めること、そのものに限らず、地域を支えていく人材として、地元のものだけではないという気がするんですが、その点についてどうでしょうか。

(坂城高校を発展させる会：ワダ)

もちろん、そのとおりであります。

私は、住まいは千曲市でありまして、坂城町のもものではございませんが、このエリアから坂城町の工業を中心とした企業がたくさんございますので、周辺部から坂城地域へ仕事で出掛ける方はたくさんおられます。

それから先ほど全員がすべて坂城へ定着しているような、そういうふうにお聞きになったかと思いますが、決してそういうことではありません。今の高校、全日制普通科の進路指導としまして、普通今の時代は進学優先で、大学、専門学校、短大等、こういったところを将来の進路として先生方は指導されているようでありますが、坂城高校の特色としましては、その中でも地元中学を出まして、就職を希望する子がおります。

そして就職希望先はいったいどこかということ、そのほとんどが坂城町なんです。こういった状況からして、非常に地域へ根付く、地元で働きたいという、そういう本人、子どもたちの願いというのは、かなり強いのではないかと思います。

ちょっと余談になりますが、私の息子はこの学校にお世話になっておりましたが、3年生ですけれども野球部に所属しておりまして、毎年野球部では夏の甲子園の大会の予選が始まるころには地元の方に寄付を募って部費を確保しているという、こんな伝統といえますか、長年やっているわけです。

地元の企業の人は、毎年出しているからというか、そういったこともありますが、OBを中心に地元の企業から毎年、だいたい100万程度のご芳志をいただいているというようなことがございます。それもなぜかということ、地元の子どもたちが行っているから、じゃあ頑張ってもらおうという、そういうことでありまして、その企業の中には、当然千曲市、長野市、上田市、そういったところから通っている職員の方が、たくさんおられると思います。

しかし坂城の地元の子たちも、地元へ就職しているし、地元の子がやっているんだから、じゃあ協力しましょうと。こんなような状況の中で、やはり地元意識というのは企業、地域の人たちも強いものだというふうに思っております。

(中村委員長)

ほかによろしいでしょうか。時間がまいっていますので。

どうもありがとうございます。

それでは、通学区の全体に関してあと2件、ご発表をお願いしたいと思います。13番目で、「県立高校の発展と存続を願う会の主張」ということで、ご発表は久保田良一さま、お願いいたします。

(県立高校の存続と発展を願う会：マツシマ)

今、世話人に久保田良一氏が発表する予定でございましたが、急きょ都合がつかなくなり、私代理の中条村議会議員のマツシマカズマであります。よろしくお願いいたします。

私たちの考え方を一言で申し上げれば、拙速に結論を出すのではなく、教育的な議論を積み重ねようということでありまして、その結果、この地域の高校の役割は終えたなという結論が出れば統廃合もありましょうが、議論を尽くさない段階で統廃合ということには大

反対ということでもあります。

県教委が、この通学区の学校はいくつ、この学校とこの学校を統廃合などというやり方ではなく、学校の当事者である生徒、保護者、教職員、同窓生をはじめとする地域住民が、この地域にどのような学校が必要なのか話し合う中から、学校数にせよ、学校名にせよ、現れてくる。

そのような改革を望んでいるのであり、そのような議論の異なる可能性を推進委員会は持っているからであります。今回第一推進委員会がこのような機会を設けたことは、推進委員の皆さんの見識を示したものと、私たちは高く評価いたします。

今、県下各地で高校改革プランに関心を持つ、さまざまな人々団体が、それぞれ高校教育改革について検討をしています。北信地域についてみれば、中野と飯山では市民レベルの組織で議論が進んでいます。そのような市民レベルの意見が、十分反映された教育改革であってほしいと節に願います。そのためには、市民レベルの議論の進行を見守り、その結論こそ尊重されるべきです。

2 つ、高校の統廃合については、地域の人々のじゅうぶんな理解が欠かせません。地域社会の納得がじゅうぶん得られないまま、統廃合で新たな学校ができたとすれば、学校にとっても地域社会にとっても不幸なことです。今年度中に実施計画をつくるというスピードよりも、多少時間はかかっても合意形成することのほうが長野県の将来にとっては有益であるはずです。

3 つ、高校改革プランを実行しなければならない理由として、少子化、財政難と並んで、生徒の多様化ということが、挙げられていたと記憶しますが、多様化する生徒にきめ細かく対応するということが、普通科の大規模校は、相いれないのではないのでしょうか。

4 つ、多部制・単位制高校は長野県に設置されていないため、推進委員会の議論においても、まだ具体的な像を結べていないようです。後発となる長野県においては、他の都道府県の先行例の優れている点ばかりでなく、問題点もじゅうぶん見極めて検討されることができるようになります。

長野県において、多部制・単位制高校を必要としている生徒像を、もう少し明確にする必要があると考えます。

5 つ、今日の教育改革の最も大きな特徴のひとつは、危機に対応して改革が推進されるのではなく、逆に改革によって危機が生成し、増幅している点にある。東大の教育学者佐藤学先生もおっしゃっています。

経済的費用対効果の重視も大切でしょうが、教育は百年の計の下に行わなければなりません。結論が1年、2年遅れても、じゅうぶんな議論をお願いしたいものであります。

以上でございます。

(中村委員長)

ご質問等ありましたら、お願いします。

何かございませんでしょうか。1年、2年改革が遅れてもということですが、地域でまとまりつつある意見、そういうものはすぐ実行してもよろしいかなという面もあるかと思いますが、そういうものも遅らせてということでしょうか。

段階的には進めてもよろしいんじゃないかなと思うのですが、いかがでしょうか。

(県立高校の存続と発展を願う会：マツシマ)

はい、私もそのように考えております。たまたま、このごろ私たち大勢で、群馬県の尾瀬高校を視察研修をさせていただきましたが、ほんとに時間をかけて地域の住民の声を聞いた上で、教育委員会がご判断されたというお話を承ってまいりましたので、ぜひひとつ参考にしていただいて、住民の声をじゅうぶんに反映していただきたいと、このように思います。

(中村委員長)

多部制・単位制高校を慎重にということなんですが、私は他県と本県の類似校を見学させていただきました。非常に魅力してはあ。それから設置した後、先生方のご努力が非常に大きいと思うのですが、生徒の利益にかなうようにシステムをどんどん変えていく。

またそういう改善をしていくということが、できる自由度があるというふうに考えているのですが、それでも慎重にということであれば、どういう判断で多部制・単位制高校は設けていったらよろしいのでしょうか。あるいはそういう、システムはいらないとお考えでしょうか。

(県立高校の存続と発展を願う会：マツシマ)

大事なことです。から、どういう結論を申し上げていいのか、ちょっと判断できませんので大変申し訳ありませんが、回答を控えさせていただきます。

(中村委員長)

何かほかにございますでしょうか。

(森野副委員長)

ちょっと失礼な言い方になります。ますので、いつごろをめどにこういったものを納得され、あるいは理解されているのか。

風船玉のように、片方突っきますと、片方が膨らみますよね。そういうふうに片方を痛み付けると、片方が出ると。こういうような状態になってくると思うんですよね。

だからいつまでと、ある程度めどがないと、結論は出ないと思うんですよね。だから拙速と言われておりますけれども、どの辺でどうなのか、お願いしたいと思います。

(県立高校の存続と発展を願う会：マツシマ)

確かに、教育委員会の皆さんは、かなり時間をかけて議論をされたとおっしゃっていただけますけれども、私たちに聞こえてきたのは昨年からでございます。それまでのいろいろな議論については多少は聞こえてきた程度ということで、年内に結論を出すということではなくて、もう少し議論を積み重ねる必要があるんじゃないかと思います。

いつまでということではなくて、もう少し議論を深める必要があるんじゃないかと思っております。

(森野副委員長)

地域でのご議論等は、何回かやられていらっしゃるのでしょうか。

(県立高校の存続と発展を願う会：マツシマ)

はい。例えば中条高校でも、懇話会の中でそのような会話をしておりますし、議会も応援をして中条高校の場合には中条村でございますが、隣村の小川村さん、あるいは長野市の七二会中学校の皆さん、そういう方々と懇談をしたりしている。こういう形でございます。

(森野副委員長)

わかりました。

(中村委員長)

ほかにございますか。ないようでしたら、よろしいでしょうか。

はい、どうもありがとうございました。

それでは14番目のご発表で、「ナガノに五輪記念の国際高校を」というタイトルで、草間重男さま、お願いいたします。

(長野五輪記念学校設立準備室：草間)

私が最後になってきました。大変お疲れのことと思いますが、ぜひお聞き願えればと思います。長野に長野五輪記念の国際高校をということで、意見を発表させていただきます。

今回の高校再編問題が巻き起こった中で、東信、北信の高校の文化祭を見に行かせていただきました。再編対象の候補高校です。テレビで報道された、玄関に貼られた生徒の廃止反対のメッセージを1枚1枚、全部読みました。学校をなくすまいという生徒の思いが込められていたものです。

中でも、クラブの存続をしてほしいという意見が幾つもありました。私どもは大人として学校の存続ということ、まず第一に考えていますが、生徒の目線から見たらクラブの存続が最初にあった、その思いを大事にして提案させていただきます。

私は98年の長野冬季パラリンピック、オリンピックが開かれたとき、私は対人地雷廃絶を長野から世界に届けるように、県民に呼び掛けたものです。開会式で、イギリス人の地雷廃絶活動家クリス・ムーンさんが聖火を掲げて、雪ん子の子どもたちと一緒に走った場面には感動いたしました。

しかし対人地雷廃絶のメッセージは世界に届けることができたものの、セットで提案した長野五輪記念学校が、宙に浮いたままになっており、1日も早く開校を願っております。統廃合に挙がった高校関係者には、大変恐縮な言い方になるのかもしれませんが、ピンチは裏返せば新たな魅力ある学校をつくる機会となり得るんじゃないかなと思います。

長野五輪記念学校といえば、教育県に、そして五輪開催都市に最もふさわしいものではないかと思います。公設民営なら、国際的魅力を十分引き出せると私は考えます。受け皿となる決意を込めて、発表させていただきます。

長野五輪の記念の学校というものはまだないのですが、国際交流や、世界平和を作り出

すという魅力があると。そして公設民営で、接ぎ目なく存続できると思います。今までも存続という話がありましたが、確実に存続するという方向で話ができるんだと思います。そしてまた授業料、PTA会費等は、県立と同じにすると、そういうことをまず申し上げさせていただきたいと思います。

県のご理解を得て、3年を移行期間とすれば、担任を例年通り持ち上げて、クラブの存続など通常の新年度以降行うことが可能だと思います。希望によっては地域の皆さんとも協力しながら、ホームヘルパー2級を在学中、自由選択で取得できると考えていきたいと思っています。

そしてまた、地元の皆さんにもこれは資格取得にも開放したいと考えております。学校運営協議会というのが、今、いろいろと話題になっていますが、地域の皆さんと手を携えながら、そしてまた長野五輪という魅力をさらに増すために、いろいろな関係者にご理解を願って、運営を進めていきたいと考えています。

他のオリンピック開催都市の高校等の海外留学を推進し、生徒の国際募集をする。これは大きなプレゼンテーションだと思います。今までの学校は、生徒をどこから持ってくるかということで議論がありましたが、生徒をほかの国からも集めるということが、ひとつの魅力だと思います。

そしてまた、パラリンピック、スペシャルオリンピックスの理念を生かし、地元中学校の特殊学級や、養護学級と連携教育を推進し、特別支援教育を充実する。2学期制の学年制と単位制を併用するという、このようなことを行ってきております。

ちょっと時間が来ていますけれども、お手元のほうに補足説明として一部A3でもってお渡ししてありますけれども、地域高校で地域の生徒全員にはこの実験をしてみようじゃないかと。東信、北信の委員会を傍聴した中で、気がついたことを提案しました。

それから2番目として、中学生にも、魅力ある地域づくりをということで、やはり地域づくりも、この委員会の外に行っていただければいいんじゃないかと。先生の委員さんには、そういったことを提案していただけないか。

それから同じように、魅力ある授業づくりも行っていないか。時代が変わっていく中で、魅力ある授業づくりのあり方も変わっている。そういったことも踏まえ、そしてまた2007年版の、教育の場に難題に対応したり、魅力ある教室づくりにもつながるのではないかと思いますので、ぜひこれもお読みいただければと思います。

(中村委員長)

それでは、質問等ありましたら、お願いいたします。

それでは私のほうから。学校の規模が問題になると思うんですが、新しい学校をつくることで、県が再編整備を進めようとしているそのところに、こういう新しい学校をということですが、私はどちらかというと、国際教養を深めるような形で、もうすでに科が設置されています。そういうところが、力を入れてやるべきものではないかなというふうに考えるのです。

例えば長野西にあります国際教養や、ことしもスペシャルオリンピックスにだいぶ活躍されたと聞いていますし、ほかのところでも長野市内、だいぶご協力をいただいた。それからオリンピックのときも当然協力して、生徒たちがそういうところにかかわってきたと

いうことがあると思うんですね。

そういうのをまとめる形で、やや充実していく形でも、そのご趣旨の理念というのは達成できるのではないかなと思うのですがいかがでしょうか。

（長野五輪記念学校設立準備室：草間）

重なる部分も確かにありますね、ソーシャルにね。ただ、重ならない部分もある。例えば長野西高校さんでは、スペシャルオリンピックスの理念を生かしたかと言っている。例えばオールワンの生徒を入学させている訳ではなく、0 点の生徒を入学させている訳でもない。

こういった点は、スペシャルオリンピックスの理念とは、ちょっと違うかなと思います。ボランティアに参加するという方だけを、私には考えられますし、それから学校の大きさということですけども、私は「特にこの学校」というような指定の仕方はしていませんけれども、今般再編があるということの厳粛な事実の中で、廃校になる学校も出る可能性があると。

じゃあ、そういう学校と連携する道があるんじゃないかということですね。今まで、「廃校になる、廃校になる、悲しいんだ、悲しいんだ」ということがあったんだけど、そういう存続の道だってあるんだってということを私はお示しいたしたわけで、中においてそれなりにおいて変動はあると、こういうことです。

（中村委員長）

わかりました。ありがとうございます。

ほかにございますでしょうか。

（丸山委員）

例えばイメージとしてまったく新しくどこかにつくるといことなのか、それともどこかの学校が統廃合の関係の中で、じゃあこういうふうに変換をしていこうということになるのか、ということがひとつ。

それから公設民営というのを、もう少し詳しくイメージを説明してください。

（長野五輪記念学校設立準備室：草間）

まず第1点目、まるっきり新しいところということではないですね。既存のものが廃校になったと、それと同時にということの一つ目想定をしています。過去には、まるっきり新しいものをつくるということに、挑戦した経緯もあります。

それからあと2点目が...

（丸山委員）

公設民営の具体的イメージ。

(長野五輪記念学校設立準備室：草間)

公設民営ですけれども、建物が現実にはその話題に出ますと、現実には県立高校がということですね。だから県の所有するものということなわけです。だから所有が県だということです。現実につくられているものが県だと。

ただ運営のほうで、今説明しておわかりのように、かなり柔軟な発想でもって運営をしようと、魅力を引き出そうとしていますので、これを運営を民間にしたほうが、より魅力を引き出せるのだと私は思います。そういう意味で、公設民営というふうにご説明させていただいています。

(中村委員長)

ほかにございますでしょうか。特にございませんか。なければ時間がまいっておりますので、どうもありがとうございました。

(長野五輪記念学校設立準備室：草間)

どうもありがとうございました。

(中村委員長)

さかのぼって、特に聞いておきたいことはございますでしょうか。よろしいでしょうか。

14件、発表していただきました。長時間にわたり、傍聴もしていただき、また意見交換もさせていただき、大変ありがとうございました。具体的に要点を強調してご発表いただいたことで、資料と合わせてわかりやすくなったと思います。

ご発表の内容は、大変貴重なものです。われわれの議論に生かしていけるというふうにご確信しておりますが、まだ時間が短かったという点もありまして、ご質問等がまだ委員さんの中にあるかと思えます。

今後問い合わせをさせていただく場合もあるかと思いますが、そのときはよろしくお願ひいたします。率直なお気持ちも含めて発表していただいて、充実した意見交換になったのではないかと思います。

では最後に要望書等の資料もあるそうですので、次回の日程も含めて事務局のほうからご説明をお願いいたします。

(三澤教育支援主事)

ご発表いただいた皆さま、本当にありがとうございます。短時間で手際よい発表いただきましてありがたく思います。

委員さんのほうの資料といたしまして、ほかに要望書として、先ほどご発表もございましたが、長野県屋代南高等学校同窓会さまより、屋代南高等学校の多部制・単位制高校への転換についての要望書がまいっております。

それと、これも本日の第1区の再編整備にかかわることではありますが、飯山照丘高等学校を発展させる会さまより、飯水岳北地域の高校改革についての要望書がございます。それともう一点、長野県高等学校教職員組合長水支部ということで、推進委員会のあり方についてという要望が来ております。また、ご参考にしていただければと思います。

さらに前回第 10 回の推進委員会以降、事務局のほうで説明にまいりました会等がございましたので、こちらも述べさせていただきたいと思います。11 月 3 日には中野市、中野市内高校のあり方を考える市民会議さま、こちらで事務局より高校改革についての説明をさせていただきました。

それと 11 月 7 日ですが、屋代南高校におきまして、高等学校改革を学ぶ会ということで説明に出向きました。内容につきましては、今、ご発表が詳しくございましたので、略させていただきます。

あと次回の日程であります、非常に各委員さま方の日程取りが難しくなっております。現在 11 月 28 日あたりではどうかということで、調整させていただきたいと思います。また委員長さまとご相談の上、ご連絡差し上げたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

以上でございます。

(中村委員長)

はい。委員の皆さまは、特に何かございますでしょうか。

事務局、いかがでしょうか。

(三澤教育支援主事)

すみません。28 日の午前中でどうでしょうかということで、よろしくお願いいたします。

(中村委員長)

月曜日ですね。

ほかは何かございますか。

なければ、第 12 回は 28 日の午前中ということで、議事のほうは 10 回のときの最後のところで申し上げた内容で議論を進めたいと思います。また何かありましたら、言っていたければと思います。それでは、よろしいでしょうか。

それでは、第 11 回の高等学校改革プラン推進委員会を、これで閉じたいと思います。どうも、スケジュールの点等、ご協力いただきまして、ほんとにありがとうございます。